
Blueblood

永瀬ゆずり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B l u e b l o o d

【Nコード】

N 5 4 4 6 J

【作者名】

永瀬ゆずり

【あらすじ】

人間と吸血鬼の共存の為に設立された吸血鬼専門犯罪対策組織「ヴァンパイア特務機関」通称：VIAはペア制度が基本。やる気がないが実力はSSランクナンバー3捜査官エルのパートナーになりたいと、8歳の子供がVIA最高位ランクのSSランク新人に配属された。

文字も書けないその子供がVIAの採用試験を突破した理由は桁違いの魔力とその強さにあるのだが、肝心のエルは過去の事件からペアを組むつもりはまるでなくて――？

ZERO 1話

荒く続く呼吸音と、心臓の音、そして自分の足音しかトイーには聞こえない。だが、音一つ耳に届かずとも背後からは恐怖が追いかけてくる。

（逃げなきゃ、逃げなきゃ）

一度、喉を鳴らして唾を飲み込んだ。からからに乾いた口の中では水の代わりにもならないけれど、呼吸と心臓の音と、山の獣道を走る自分の足音以外も聞こえるように。

途端に視界が反転した。前しか見ていなかった所為で、大きな木の根に足元をすくわれてしまったのだ。

「クソっ……」

舌打ちして身体を跳ね起こそうとしてもたつく。銀色に光る何か、足の指に絡まっていた。それを無理矢理剥ぎ取ってから、トイーは自分が手にしたものを目を瞬く。

それは、銀の十字架だった。

吸血鬼避けだろうか。だとしたらここの町は、随分遅れていることになる。

事実、ぎゅっとその十字架を握るトイーの手の平は焼けるどころか、熱くも感じない。

それでも銀の十字架は特別で高価なものだと耳にしたことがあった。まだ年端のいかぬ子供である自分の目から見ても、高価そうな細工が施されていると分かる。

換金できるかもしれない。まだあそこから逃げ出せると決まった訳ではないけれど、この先無一文ではどうしようもないと、分かっていた。そう考えて、トイーはその十字架をポケットに突っ込む。

「捕まるもんか……！」

先日降った雨の所為で、地面がぬかるんでいた。泥だらけの裸足が地面の固さに傷付く事はなかったが、坂道では足をとられてしま

うのだ。子供の足で、この山道を抜ける事はなかなかの困難だった。そして麓まで運良く逃れたとしても、その先には更に困難が待っている。それは分かっていた。

だが最後の賭なのだ。

起死回生をはかる、最後のチャンスだった。

痛みも気にせず再び立ち上がり、右か左かも分からない山道を駆け下りようとしたその時、遠くでちらりと光が霞んだ。ぎくりと身体を強張らせ、慌てて今自分を転がせた大きな樹木の裏に隠れる。耳を澄ませれば、大人の足音と話し声が聞こえる。木の根に隠れるように身を潜めて、身体を縮ませた。

「居たか？」

「いや……こつちから足音が聞こえた気がしたんだが」

自分を捜す大人達と、自分の距離は軽く百メートルはある。同族が居るのだ。その事実にとつとした。

（ニンゲンだけなら何とかなると思ったのに）

分かり切っていた事実でも、身をもって実感するのは違う。ぎゅっと身体を抱き込むようにして座り、呼吸を殺した。

いずれ見つかってしまっても、一分一秒でもあそこから逃れられるように。

がさり、と唐突に近くの茂みから音がしたのはその直後だった。ぎよっと思わず、腰を浮かせる。一斉にまばらだった光が、こちらを照らした。

「あれえ？」

同じ、子供だった。むしろ、トイーよりも幼いように伺える。間抜けな声と表情で、茂みから顔を出したその子供はきよとんとトイーを無邪気に見上げた。

上質な血の香りがした。血なまぐさいあの鉄分の匂いではない。

（コイツ、吸血鬼だ）

同族の匂いは鼻で分かる。緊張したまま、トイーは暗がりで子供の様子を観察した。

真つ暗闇の山の中で、その子供の瞳の藍色の瞳だけが澄んで見える。

「おい、こっちだ子供の声がした！」

その瞳の色の意味に気付く前に、背後から複数人の足音が近付いてくる音が聞こえた。慌てたトーイは、立ち上がる。だが突然茂みから出てきた子供に腕を掴まれてしまった。

「なっ……」

「なあ、ここ何処だ？」

「知らねーよそんなのっ！」

「居たぞここだ！」

切迫した状況下での暢気な台詞に大声を上げたトーイは、自分に向けられた光と怒声に後退る。だが、その子供の手はまだトーイを掴んだままだ。

その手を振り払う事に、トーイは怯んだ。それが逃げ出す最後のチャンスを用意にした。

「見付けたぞトーイ！ 今晚のご指名はお前なんだ、さっさと来い！」

「った、離せよ！」

「オイ、傷は付けるなよ！ このことが知られたら厄介だからな」

「コイツは何だ？ 見かけない顔だが」

首根っこを軽々と持ち上げられてしまっただけからトーイははっと息を飲む。眼前に、何も知らない、自分より幼い命があった。

だから、自分に構わずに叫んだ。

「逃げるバカ！」

「バカって——うわっ何だよ！？」

「お前、どこから紛れ込んできたボーズ」

「どこってそれが分かんないから困ってんだよ！ ボーズとか言うなよなっオレにはちゃんと名前が——あれっ？」

子供特有の強さなのか、鈍いからなのか、腕を掴み上げられても怯まずに言い返していた子供が慌て出す。その間にトーイはあつと

いう間に脇に抱え込まれてしまった。自分を抱え込んだ男は、同族だ。匂いで分かる。もう逃げられない。

「あれっ？ あれ、ない。あれ？」

その間にも間抜けなお子様は掴まれていない方の手でズボンのポケットをひっくり返したり、身体をまさぐって何かを探している。

歯噛みするトイーを抱えた男がくと鼻を鳴らした。そしてトイーと同じように、その子供の瞳の色に気付く。

「コイツ吸血鬼だぜ。しかも——純血だ」

「こりゃあ……上玉じゃねえのか」

ライトに晒されて、子供の顔が露わになる。乱れた髪には茂みで絡んだ葉が引つ付いたままだったし、頬や手足も土で汚れてはいた。だが傷一つついていない、人形のような綺麗な肌と、整った面立ちをしていた。何より、凜とした大きな藍色の瞳がある。

純血の吸血鬼の子供を、トイーも初めて見た。

その美貌だけで人間を魅了し、誘惑し、その血を啜るなどという芸当ができるのは純血の吸血鬼だけだ。その子供は大人ほどの妖艶さはまだ備わらないとしても、十分に可愛らしい子供として通るのも道理だった。

「どうする」

「純血の子供なんて滅多に手に入るモンじゃねえしな……だが万一どっかの子供だったらややこしいし」

「脱がせればいい。正真正銘のお貴族様なら、首元に紋章がある筈だ」

「うつわ何すんだよ!？」

ぐっと胸元を掴まれた子供が非難の声を上げるが、男は構わずに土で汚れた子供の服を破く。

その肌が明るく照らし出されたが、子供らしいなだらかな鎖骨ときめ細やかな肌があるだけで、焼き印どころか染み一つなかった。

目配せし合った男達が、無言のまま頷く。その意味にまだ、子供は気付いていないようだった。奥歯を噛み締めたトイーはもう一度、

動きの鈍い子供に怒鳴る。

「逃げろってば!!」

「逃げろって、オレ何にも悪いことしてないぞ?」

危機的状況を察しているのか居ないのか、大きな藍色の目がトイーを見上げる。話の通じない苛立ちをぶつけるように暴れると、奇跡のようにトイーの身体が男の腕から抜け出した。

「……ッこいつてば!」

「うわっ」

「待て!」

突っ立ったままの子供の手を引いて走り出す。ほんの僅かの差で、掴もうとした男の手が空を切った。

「走れ!」

「なあ何でお前逃げてるんだ? 何か悪いことしたのか?」

トイーは必死だというのに何とも緊張感のない声で、子供が尋ねてくる。とりあえずあの男達よりトイーを信用することにはしたのか、トイーが手を引かずともその後についてきた。

逃亡のチャンスは再び訪れたことになるが、危機的状況は何ら変わらない。トイーも必死だ。順序立てて説明してやれる余裕などない。

「してねーけど、逃げないと捕まるだろ!」

「悪いことしてないのに捕まるのか?」

「悪いことしてんのはアイツ等の方だっつうの! いーから逃げろってッ気持ち悪いオッサン達に色々されたくないだ——ッ!」

がん、と頭に衝撃が走った。鈍器で横から頭を殴られたのだと、地面に倒れ込んでからトイーは気付く。別方向からの追っ手だ。

地面に転がったトイーの両手首と両足首に、間髪入れずに鉄鎖の枷が嵌められる。途端に、身体中から力が抜けた。

(くそ……)

「おい大丈夫かおまえっ!? ——ッ何でこんな事すんだよ!」

「おい、この子供も縛り上げる!」

（だから逃げろつつつたのに――）

逃走の疲労も重なって、トイーの意識があっさりとしんでいく。じやらりと、嫌な鉄の鎖の音がする。それはあの地下室に続く音に、他ならない。

既に周囲は暗闇だというのに、窓の外に見える空は泣き出しそうだと分かる程、空気が重い。一雨くるのかもしれないと、エルは藍色の瞳を細めた。

そんなエルの視線を辿ったのか、豪華な椅子にでっぷりとした身体を腰掛けさせた男が、声を掛ける。

「雨が降りそうですね。野宿はおつらいでしょう」

「……そうですね」

面白くもないひやかしに感情一つ乗せない相槌を返すと、いやらしい笑いを浮かべたこの町の領主は、肩を揺らして笑った。

「いやいや、申し訳ない。この町にはヴァンパイアが住んでおりませんでね。勿論、町への出入りを禁じている訳ではないし出稼ぎに来ている者も多い。この館に勤める者にもヴァンパイアはおるのですが――如何せん、こんな小さな町では何かあった時に対応もままならず、住民の不安を煽る事になりますのでな。ヴァンパイアの方がこの町に滞在される時は、まず領主である私に報告させる事になっておるのですよ」

「それで、滞在は許可して頂けるので？」

「許可も何も、ヴァンパイア特務機関の方の滞在拒否など最初からできる筈ありませんしなあ。どうぞこの館にご滞在下さい。しかし、何の事件もない、こんな辺境の町にヴァンパイア特務機関が何のご用で？」

人の良さそうな笑みを浮かべてはいるが、目の奥が笑っていない。敵意は感じないが、好意にはほど遠い感情だ。こういう人間は大抵

よからぬ事を企んでいるものだ。

事実、その目線は何かを探るようにねっとりエルに絡んでくる。不快なことこの上なかった。

「極秘事項ですのぞ」

「はっは——我々の税金で成り立っているというのに随分冷たいお返事ですな。致し方ないこととはいえ」

「ご協力をお願いする事もあると思いますので、その折りにはお話できるかと」

機械的にそう告げると、一瞬だけ眼前の領主が忌々しげな顔をした。だがそれはすぐに取り繕われる。

「優秀と名高いインテグラ捜査官のご活躍は、こんな辺境でも耳にしておりますからな。どんな事件かは知りませんが、すぐに解決なさることでしょう。我々としても、吸血鬼犯罪に巻き込まれるのは御免ですからね。可能な限りご協力致します」

「有り難う御座います。——ああそうだ、メタム領主。数多くの孤児院や児童施設に多額の寄付をなさっていると聞きましたぞ」

「ええ、こんな時代です。不幸な子供を少しでも救えればとね」

会話には淀みがない。特にメタムに焦った様子も見受けられなかった。だがエルも何でもない世間話のように、淡々と会話を続ける。「その孤児院の子供達がどうなっているのか、ご存知ですか？」

「いえ、それは……私は経営には口出ししておりませんし、年一度ほど視察することはあるくらいですから。ですが誘拐されたとか、何か問題があったとは耳に入ってはいませんねえ。それが何か？」

「いえ、最近ではヴァンパイアの子供についての犯罪が増えているもので、特務機関も問題視しているのです。子供の頃の教育がままならない事はそのまま犯罪増加に直結しますから」

「インテグラ捜査官が今回訪れたのは、そういう類の犯罪ですか。吸血鬼とはいえ子供を使った犯罪など、許せませんな」

「それだけではないようですが——もし単なる噂でも何か耳に

挟む事がありましたら、お知らせ下さい」

そう告げて、意味ありげにエルはメタムを見た。顔色は変わっていない。表情も、変化はなかった。だが豪華な指輪がきらきらと並んだ指が何度も肘掛けを叩いている。エルはただ冷静にそれだけを観察した。

「それでは、失礼致します」

階級的には、エルの方が遙かに上だ。だが一応の礼儀と頭を下げ、荷物を持ち直しエルは踵を返す。引き止める声はなく、心得た執事が慌ててエルの行方を遮る扉を開いた。

「お部屋までご案内致します」

軽く頷くと、古めかしい館の中を執事が誘導する。エルに宛われた部屋はそう回り道をする事もなく、すぐに辿り着いた。執事の後ろについて歩きながら周囲を観察する事も怠らなかったエルには、この部屋がこの洋館の中でどの位置に存在するのも正確に分かる。（東の客室か）

鍵を使った執事に部屋の中に案内され、エルは旅行用というには小さなバックを下ろした。何か用はあるかと問いかける執事に手の素振りだけで下がれと命じ、いつの間にか雨が降り出したらしい外を大きな窓から眺める。

「まったくどこほつつき歩いてんだ、あのバカガキは……」

最初からあまり気の乗らない仕事だった。既に嫌な予感はあるのだ。

だがその予感から確実に逃れられない事態に既に陥っている気がして、エルはメタムには決して見せなかった疲れ切った渋面で、深々と溜め息を吐いた。

ZERO 2話

失態を震える声で報告した男が、床に這い蹲って主人の言葉を待っている。脂ぎった指にぎらぎらと煌めく指輪をつまらなそうに眺めながら、メタムはゆつくりと葉巻の煙を吐き出し、手に平に持った携帯電話を眺めた。

「これが迷い込んだ子供が持っていた携帯電話、ですか」

「は、はい。ですが壊れているようで」

「——確かに……何も映りませんし、反応しませんねえ。充電切れとかいう事は？」

「それが充電もできないようで。完全に壊れているのかと」

「これではその子供の身元が判明しない。……いずれにしてももう外に出してやる訳にはいきませんが、面倒になりましたねえ」

溜め息を吐いた主人に焦ったのか、使用人が慌てて顔を上げる。

「じゅ、純血の子供ですが首元に紋章はありませんでした。容姿の方も、十分にメタム様やお客様方にご満足頂けるかと」

「ほう、それは楽しみだ。……ですが今ここをヴァンパイア特務機関が嗅ぎ付けている。こんな時に、とんだ報告だ」

「で、ですがトーイも迷い込んだ子供も現在、地下室の方に捉えていますので」

視線を落とすと、ひつと息を飲んだ使用人の男は頭を下げ直した。だがメタムは手を振って、部屋に控える部下に合図を送る。

がしりと両側から二人の男に腕を掴まれ、使用人は声にならない悲鳴を上げた。だがすぐに猿ぐつわを噛まされ、部屋から引きずり出されて行く。

「まさか殺しちゃうんですか？」

扉が閉まってから、メタムが座る椅子の横で一部始終を見ていた男がどうでもよさそうな声を上げた。腰から銀色の鞘に収められた剣を下げている。

「あんな使用人の代わりなどいくらでも居るでしょう」

「あのいけ好かないお貴族様に見つからなかっただけヨシじゃないっすかあ。あんまり殺しまくると人手がなくなるんですよ、人手が」
「そんなもの、そこら辺にうろついている破落戸に声を掛けられただけでしょう」

「あーそうですけどねー」

「こんな世の中だ。人間に使われる吸血鬼は山のように居る。貴方のようにね、ザイン」

見上げられて、ザインはその後頭部を掻いた。

「ま、そーですが。……で、どーするんですあのお高くとまったの。やっちゃいますか？」

「まさか。何ごともなく、お帰り頂きますよ。……何せヴァンパイア特務機関のSSランク捜査官だ。無下にはできませんからね」

「ヴァンパイア特務機関ね。噂には聞きますけど、そんなに凄いですか。人間と吸血鬼の共存の為の吸血鬼犯罪専門機関って、どーせお偉いサンの道楽っしょ？」

「詳細は私も知りませんがね。特権を多々持っている事も、実力があることも、確かなようですよ。現に今回のこともどこから嗅ぎ付けてきたやら」

ちらりと目線を送られ、ザインは質問の意図を理解する。

「吸血鬼の子供を虐待してたってんで捜査された児童施設からみたんですね。どこからどうとまでいうルートは分かりませんが、ご主人様が吸血鬼の子供を引き取ったのは何年も前の話ですし決定的な証拠はなかったかと」

「成る程、だから捜査という名目もつけられずにとにかく単身乗り込ませてきたってトコですかねえ」

のんびりと短くなつた葉巻を取り替えて、メタムは背もたれに深くその背を預ける。

「しかしSSランクとは、特務機関も案外ヒマなんですかね」

「SSランクって、強いんすか」

「殆どが純血だと聞いてますよ。貴方と同じね」

「そらまあ強いでしょうね。実は実戦経験のないお坊ちゃん集団かもですけど」

揶揄られて、ザインは空惚ける。

「とんでもない。その活躍ぶりがヤラセでないなら、化け物ですよ。実際この屋敷に入って体調不良を訴えるどころか顔色一つ変えていなかった」

ふうんとザインは適当に頷く。あちこちに吸血鬼封じの仕掛けが施してあるこの屋敷で吸血鬼としての力を振るうには、血の強さが要だ。そういう意味では確かに実力者らしい。純血ならば、当然だが。

「しかもインテグラ捜査官ですよ。インテグラという名前は聞いた事があるでしょう」

「あー何かロンドンに本家がある、始祖の直系でしょ。あれマジだったんですか。ならお手合わせ願いたいなあ」

「やめておきなさい。インテグラ本家のお坊ちゃんだ。殉死で誤魔化すのも容易じゃないですよ」

その言葉に、だからこそ手を出すなどこの主人は言っているのだとザインは肩を竦める。どうやら今夜の客人はその肩書きも流れる血も、高貴でややこしいお方らしい。

「残念なこつて。……あれ、でもヴァンパイア特務機関ってペア行動が原則じゃなかったっすか？ 吸血鬼は協調性がないからその弱点を克服するナントカカントカつて」

「インテグラ捜査官は、独り者ですよ。何年か前にパートナーが死んでしまったとかで。有名な話です」

「ありや。そりやおかわいそーに」

くくつとバカにしたような笑みを浮かべたザインは、窓と叩き付ける雨にふと気を取られる。

（純血の、悲しい運命を背負ったお貴族エリート坊ちゃんね）

反吐が出そうだなあと呟いたザインに、メタムはいやらしい笑み

を浮かべたまま何も答えなかった。

次に目覚める時にはきつと、そう願っていた。それなのに、手足の鎖は変わらない。全てが夢だったのかもしれない。そう思うほど、現実感がなかった。

そう、土台無理だったのだ。

ハーフとはいえ吸血鬼の血が混ざっている自分でも、人間の、ましてや吸血鬼の大人が混じっている集団から逃げおおせようだなんて。

ようやく浮上した意識と瞼を持ち上げると、ずきんと右のこめかみに痛みが走った。

「——ツつう……」

「あ、起きた。なあ大丈夫か？」

覗き込んできた子供の顔は、大きな目を瞬きもせずじつとトイーを見ていた。こめかみに走る痛みと影になっている所為でなかなか判別がつかない顔に、トイーは新入りかとぼんやり考える。

だが、その藍色の瞳を見て一気に覚醒した。

「おま——っ痛っ！」

「じつとしてた方がいいよ。腕、痣になってるし」

身体を起こした瞬間、全身に走った痛みにもトイーは顔を顰める。

確かにあの山道を逃げ回るといふ無茶もしたし、捕まった際に一発殴られたが、それ以上の暴行を受ける覚えはなかった。

何せ自分の身体は商品なのだ。下手に傷を付ければ商品価値は下がる。しかも、今夜洋館の主に差し出される筈だった。捕まった後に必要以上の折檻されるなど、考えられない。

だが子供の指摘通り、右腕に強く掴まれた痕があった。じんわりと紫色に染まりつつあるそれは、確かに痣だ。

「他に怪我、ない？」

「……ねえと思うけど」

「よかったあ。ったくあいつらヒキョーだ。人質にとるなんてさーケータイもとられたしクサリもつけられたし！　ヘンなの。何だよこれ」

不満そうに頬を膨らませた子供の両手首と両足に、鉄鎖がついている。トイーが嵌められたものと同じものだ。

「吸血鬼封じの鎖らしいぜ。それ付けてると、オレもお前もフツーの人間の子供と変わらなくなっちゃうんだってさ」

「ふうん……そーなんだ」

「そーなんだって、分かるだろ？　お前純血なんだし、余計いつもより力出ねーだろ」

呆れたトイーに、子供は首を傾げた。まだ実感できないのかもしれない。

吸血鬼封じの呪が込められた特別製の枷と、それを繋ぐ鉄鎖はじやらじやらと重く、耳障りな音を立てる。大の字で寝られる程度の幅は持たせてあるので日常生活に支障はないが、吸血鬼としての超人的な力は完全に封じられる。吸血鬼としての力が弱い子供などは、思考さえ麻痺されるらしい。この鎖を付けられて人形のようになった子供を、トイーも何人か見てきた。

トイーより幼いにはつきりとした意識と自我を持っているこの子供は、流石純血だといった所だろうか。

「お前さ、何であんな所に居たんだよ」

純血というその生い立ちからふと興味を覚えて、トイーは周りを見回しながらそう尋ねた。

いつも閉じこめられている部屋とは違う、独房だ。傷を付けないようにと無駄に豪華な絨毯や香まで焚かれている監禁部屋とは違う。他の子供達も居ない。

ただ冷たい壁と鉄格子の暗さは、変わらない。

「うーんと……内緒」

「……内緒って……ああ、でもお前、家無しだもんな」

世界が吸血鬼と人間の共存を歩み始めた時から吸血鬼の血も人間と混じるようになり、純粋な吸血鬼としての血の力は殆ど失われつつあった。だが、世界に初めて降臨したと言われている始祖の吸血鬼の血筋は未だにその純血を保ち続けている。その血の力は、藍色という瞳の色に出る。そしてその純血の証として、生まれたその時に首元にその家の紋章を入れ墨されるのが慣わしになっていた。

その入れ墨がないという事は、純血でありながら家を継げない、その家にとって不要な子供という事だ。早い話が、捨て子だということになる。

そもそも純血の吸血鬼は不老なので、子供を作る必要がない。ただ、死ぬことがない訳ではないので、子供が全く必要ないと言えは間違いになるが、家督を継ぐ子供が一人二人居れば一世紀は子孫に困らない。その為、生まれてた子供を育児放棄する率が人間より圧倒的に高かった。ハーフの吸血鬼も、不老とまではいかなかったも寿命や身体能力は人間と異なる。その為、両親が上手くいかなかった際は捨てられる事が多かった。

何より未だ吸血鬼と人間は確執は強く残っており、結果的に吸血鬼の血を引く子供は捨てられやすいという社会現象を産み出してしまっている。

トイもこの子供もその一人という訳だ。

「いえナシって？」

「んー……いや、別に」

少し生まれたタイミングが違えば、純血の吸血鬼としてまるで違う暮らしができたかもしれない可能性など、知らない方が良いだろう。これから先を思えば尚更だと、トイは誤魔化してしまう。

だがその『これから先』に、自然と表情は翳った。

「……結局捕まっちゃったのかよ、お前も」

あの現場に居て見逃してもらえとは思えにくかったが、巻き込んでしまった罪悪感がちくりと胸を突いた。

「なあここ何だ？ お前なんで捕まってるの？」

だがまだその子供は無邪気な顔のまま、残酷な質問をした。
逃げられなかった。

子供の無邪気さとその事実と奥歯を噛み締めて、トイは乱暴に答える。

「ここはどっかの屋敷の地下室だよ！ オレもお前もこれからヘンタイジジイの慰み者にされんの！」

「……ナグサミ……それ美味しいのか？」

「素っ裸にされて舐められたりとにかく色々気色悪い事されんだよ！ 分かったか」

ぎろりと睨むと、子供は考え込んだようだった。少ししてから、神妙に口を開く。

「オレ、食べたことないけどあんまり美味しくないと思うぞ？」

「……」

こんな子供に伝える努力もむなしく、トイはぷいと横を向く。どうせ分かっていようがいまいが、される事は同じだ。自分も、いずれこの子供も。

そう考えると、今度は胸にじわりと悔しさに似た失望が広がった。
(やっぱりダメだった)

今まで逃げ出せた子供は一人も居ない。そう聞いていた。その通りだった。それだけなのに。

「で、ここどこなんだ？ 向こうにも部屋があるし、他にも誰か居るみたいだけど」

子供が鉄格子の隙間から指で示す先には、更に鉄格子と赤い絨毯が見えた。それを確認したトイは、吐き出すようにして答える。

「知らねえよ。どっかの町だろ。……いっぱい子供攫って集めてんだ、吸血鬼の子供。捨てられてるのとか、迷子になってんのか。搜索願いも出されないの、多いし。誰も助けようなんて思わねえし。オレ達なんてそんなもんだろ」

語り出すと止まらなかった。堰を切ったように、トイの唇は滑り続ける。

「何が吸血鬼とニンゲンの共存だよ。戦争が泥沼になったトコで嫌な大人が組んだだけじゃねーか。何が誇り高い吸血鬼だ、やってる事人間と一緒にじゃねーか。手を組んでる分手に負えなくてタチ悪い。純血の奴らなんかもっとサイテーだ、自分だけ安全なトコに居て他の吸血鬼を助けようとしてもしねーんだから……力はある癖にな」

「……」

「オレ達、生まれてきたただけだ。……何にも、してない」

疎まれることも、忌み嫌われることも、何も。

唇を噛み締めたトーイは、両膝を曲げて抱きかかえた。小さく小さく蹲って、息を殺して——きつと、死ぬまで。

「……あのさあ」

「何だよ」

相手の顔も見ずに吐き出す声が、拗ねているようだと自分で思った。

「名前は？ オレな、クウって言うんだ！」

「——……」

ぐしゃりと、鼈甲色の前髪を掴んでちらりとクウと名乗ったその子供を横目で見た。

見事な金系の髪に、藍色の瞳が映えている。いずれももう、トーイには届かない空の色だ。それが、笑っている。

その笑顔に、泣き出しそうな顔が何故か笑みの形を作った。

「トーイ」

「そつか。トーイな、分かった！」

大きく頷いたクウが、立ち上がる。そして何の苦もなく、自分の両手首を繋いでいるその鉄鎖を引きちぎった。

驚いて目を瞠ったトーイに構わず、トーイの両手首を繋ぐ鎖もいとも簡単に引つ張って千切る。枷もどうにかならないかと手首をひっくり返したりしていたが、指一本分の隙間もないそれを外す事は諦めたようだった。

「他にも居るんだっけ？」

「……あ、ああ」

「でもたくさんだよな？ 連れてつたら危ないよなあ」

呆然としたまま頷くトーイの前で、困ったようにクウが考え込む。だがすぐに、ぱつと顔を輝かせた。

「あのさ、あのさ。あいつ等悪いヤツなんだよな？」

「あ、ああ」

「じゃあさ、捕まるよな？」

「いや……なんか地元の警察とも通じてるらしいから、警察に言っても無駄だと思うけど……」

「じゃあけーさつも捕まえるんだな！ あ、でもシヨーコは？ しようこがないとダメだって」

「……オレとお前がこーして捕まってるのが証拠なんじゃねえの？」問われるままに答えているが、何が何だかトーイにも分かっていない。しかし満足そうにクウは手を打った。

「そつか！ じゃあダイジョーブだ」

「大丈夫って……」

「早く行かないとオレ、怒られちゃうし」

ぺたぺたと裸足で前進したクウが、鉄格子を両手で掴む。そしてよいしょという気楽な声と共に、鉄の柵を左右にひん曲げた。

「……」

「じゃらじゃらしてて邪魔だよなあこれ。うう、気持ち悪い」

子供が一人、ゆうに通れる分の形に鉄格子を押し広げた両手を眺めて、クウが呟く。そしてトーイに振り返った。

「じゃあさ、行こうぜトーイ」

差し出された手の平に、トーイは手を乗せる。夢かもしれない。

けれど握った手の平は、温かった。

ZERO 3話

着信の表示は、エルの思うものとは違った。しかしどちらにしても好んで電話に出なくなる相手ではなく、眉間に皺を寄せたままエルは携帯電話を取る。

「もしもし」

『よう。捜査は順調か?』

「ゼス先輩、用がないなら unnecessary 電話は捜査妨害です。では」

『ちよつとまてコラ、先輩からの電話だぞ!』

だからどうしたと、エルは鼻で笑う。

それが向こうにも伝わったのか、深々とした溜め息が返ってきた。

『あいつかわらず可愛くねえなあ。で、首尾はどうだ』

「特に何も」

『……お前怒ってんな? 今回の任務押し付けたこと』

「別に何も」

事実を述べただけなのに、もう一度溜め息を吐かれた。

『しょーがねえだろー何があるか分からんから半端な捜査員送り込む訳にもいかんし、レオもロウも別件で手が塞がってたんだからさー』

「それが本当にオレが任命された理由なら何ら不満はないですが」

『最後はアミダで決めたじゃねーか』

「あのアミダ、細工してませんでしたか」

『してねーよ』

嘘も白を切り通されると始末に負えない。

だがエルに任務に対する不満は、本当はない。不満なのは、この事件を自分を取り扱う事になった経緯の方だ。更に言うならばお荷物を押し付けられたことも、不満だった。

『そもそもお前が素直じゃねーからアミダなんかする羽目になったんだろーが』

「どうしてそういう発言が出てくるのか理解できません」

『他でもない可愛いクウの為じゃねーか』

「そんなに可愛いと仰るなら先輩がクウを引き取られれば万事解決かと思えますか」

『ビナに殺されるだろ、そんな事したら』

「……何でビナ先輩を天秤にかけるんですか、そこで」

『パートナーだから』

さらりと告げられた単語と、その意味にエルは口を噤む。

エルにとっては禁句に近いその発言を、この上官はいとも簡単に吐き出す。もう先へ進めと促すように。

『ま、最後はお前の判断に任すさ。こればかりは二人の問題だからな』

「……ご期待には添えないと思いますよ」

『んー？ オレはそーは思わないがね』

意地の悪い口調に、今度はエルが嘆息する。それを聞いたゼスが
そうそうとわざとらしい声を上げた。

『忘れるトコだった。そのクウなんだがな』

「あのバカなら居ませんよ、現場放棄の行方不明です」

『お前がちゃんとみてなかったから迷子になったの間違いなんじゃねーの？ 山道でクウがこけようがつまりこつが歩調も考えずに放つてっただろ』

「捜査官なんでしょうアレは。何でオレが子守しなきゃならないんですか」

『それも真理だがな、まだ九歳だぞ。何かあった時お前、同じ事言えんのか』

「善処はしますよ。で、クウが何です？」

そう尋ねると、何故か電話の向こうが押し黙った。その後、ゼスは爆笑する。

ヴァンパイア特務機関SSランクをまとめる部長とは思えないその態度にげんがりしながら、エルは携帯電話を持ち直した。

「何なんですか。本当に用がないんなら切りますよ」

『いやいやいやいや！ オレが悪かった。うんうん、心配だよな』
「切ります」

『待てつて！ クウの携帯がな、いじられてんのよ。逆探知だとその洋館からの発信なんだが、どうも地下っぽくてな』

「……地下」

その単語をエルが繰り返すと、ゼスは相槌を返した。

「何でまたそんなトコに…… 吸血鬼の子供とはいえ、ヴァンパイア特務機関の人間を地下なんか捕まえてシラを切り通す程この領主はバカなんですか」

『単にクウが銀のロザリオ落として迷子か捨て子かだと思われただけじゃねーの？』

十分にあり得る話だった。

（あれだけでなくすな落とすなつつたのにあのガキ……！）

だが今となつてはクウ本人が重要な証拠になる。何せ、ここに集められていると考えられている吸血鬼の子供達は、身元がはっきりしないものばかりだ。親からの搜索依頼もない。子供達が口裏を合わせてしまえば、身寄りのない子供達を屋敷で雇っているお優しい領主様で通つてしまう可能性がある。

だがそれはそれ、これはこれ。

ヴァンパイア特務機関に所属するその証明書代わりである、銀でできたロザリオは特別なものだ。それを失うなど言語道断だ。眉間に指を押し当てて苦悩するエルを見透かしたように、ゼスが笑う。

『まあ状況を総合すると、恐らくクウは携帯も取り上げられて地下に居るつてこつたな。捕まっただらうな』

「ならその内どつかから出てくるでしょう」

『簡単に言うけどとりあえず心配してやれよ。その洋館、純血の吸血鬼の傭兵を雇つてるつて話だし』

「あの馬鹿力が負けると思いませんが」

『それはオレも思うが』

真剣に同意されてしまうと、エルは面白くない。ならば最初から余計な事を吹き込まずにいて欲しいと、心底そう思う。

「……分かりました。純血の吸血鬼に注意しろ、あのバカガキは地下、つまり恐らく地下に吸血鬼の子供が集められてると、そういう話ですね」

『そーそー。宜しくな。あ、お前も気を付けろよ』

「ご心配痛み入ります」

感動のない声でそう告げると、電話の向こうが苦笑した。

『ま、怪我一つなく戻ってこいよ。次の仕事が山のように待ってるしな』

エルが返事をするより先に、電話が切れた。

携帯電話を耳から離し、エルは一息だけ間をおく。

エルとクウはパートナーではない。なるつもりも、エルにはない。だが今、あの子供を見捨てる訳にもいかないのも、事実だ。

「——失礼します、インテグラ捜査官」

扉の向こうからノックと声が聞こえた。曖昧な返事を返したエルに、扉がゆっくりと開く。

「警察の者です。ヴァンパイア特務機関の方がおられると聞き、嫌疑内容を確認したくお邪魔致しました」

「…… 必要ない」

短く言い切ったエルに、敬礼した手を下ろして警官の格好をしたその男が戸惑う。

「ですが、町の安全を守るには必要なことかと」

「オレの滞在は、領主から聞いたのか」

「協力すべきではないかと、連絡を頂きました」

その回答に、エルは目を細める。

（成る程、警察と領主はグルか）

そんな事にも気付かないと思われる程甘くみられているのかと思うと、逆に呆れた。

「——そうだな。人捜しをしている」

「人捜し、でありますか？」

「そうだ。純血の吸血鬼。家無しのな。この館に居ると聞いたが」
家無しとは、純血の吸血鬼でありながら家紋の印がない吸血鬼を指す。

首元に印があるということは、その家の直系であり保護された身分を有しているということだ。それがない吸血鬼は純血であつてもその家の者とは見なされない。親の居ない、家のない子供と同じ扱いになる。

警官の顔色が微妙に変わった。

もし上官の言う通り、この洋館に純血の吸血鬼がいるとすれば、それは家無しだ。

「知っているか」

「――存じておりますが、どこに居るかまでは。この屋敷に居るとは思いますが」

隠し立てする気はないらしい。ということは、操っているのではなく雇っている可能性が高い。

「ならいい。他に聞く事はない」

「……了解致しました。こちらへは、その吸血鬼に会いに？」

「会いにきてくれるなと頼んでも来そうだがな」

小さく笑ったエルに警官は怪訝そうな表情を浮かべたが、すぐに姿勢を正し退室した。

一人きりになったエルは煙草を取り出して、火を点ける。

クウも家無しだ。

ヴァンパイア特務機関という肩書きをなくせば、行き場のない、捨てられただけの子供になる。今回、身分証明になるロザリオを落としたのだとしても、それがなければそれだけの扱いしか受けない子供だ。何の躊躇いもなく、地下室に捕らえてもいいと判断される存在だ。

今までクウがどんな扱いを受けてきたのか、そんな事にエルは興味がない。

ならば、これから先は？

「——あのバカ」

考えたくないエルは恐らく卑怯だ。

だが、灰にしかならなかった絆の軽さが、——重い。

「お前、強いな……」

トーイの感想といえばそれに尽きた。

地下牢を出てすぐに見張りに見つかり、大騒ぎになった。しかし自分より幼く見えるクウは、それをことごとく打ち倒し、前進を続けているのだ。手足に吸血鬼封じの枷が嵌められたままにも関わらず、である。

（バケモンだ）

感嘆の意味でそう思った。

言葉は問題だが、心底感心しているのだ。

「そーかなあ。動きにくい、じゃらじゃらしてて」

「……でも吸血鬼の大人も混じってたぜ、やつつけた中に」

「そーだっけ？ あ、道こつちでいいの？」

トーイ達はまさしく正面突破コースで突き進んでいる。クウの指先にある道に頷いたトーイの記憶通りならば、もう少しで地上に出られる筈だ。

そう考えて、ようやくこの状況に現実感を抱いた。

（……逃げられる？）

このまま——そうしたら、自由の身だ。

けれど帰る場所も行く先も、どこにもない。

「トーイ？」

「あ、ああ……ごめん。行こうぜ、また追っかけられても面倒だし」
作り笑いに気付いたのか、クウがトーイの顔をじっと見た。だが何も言わず、再び駆け出す。

（どうすんだろ、オレ）

ここから逃げる事しか考えていなかった。けれど、この先はどうなるのだろう。

先が見えた未来だと思っていた。けれど今は、先の見えない未来が怖い。

――矛盾している。

（逃げて……それで、その先は）

どんと顔がクウの背中にぶつかった。クウが急に立ち止まったのだ。ぶつかった鼻を撫でながら顔を上げたトイは、考え事をしていた所為で見えていなかった自分達の真正面を見る。

「おーおー、子供が逃げ出したからって大騒ぎしてると呼び出されてみりゃ……お前純血か。珍しいねえ」

「おじさん誰？」

「オニーサンだ。ザイン兄さんと呼ぶように」

クウの背中に守られながら、トイははつと顔を上げる。黒髪の、短く刈り上げた髪型の男に見覚えはなかった。その名前も、聞いた事がない。けれど知っている。

この館の主は、純血の吸血鬼の傭兵を雇っている。

そしてこの男は、純血だ。

「ま、生きてここから出られたらな？」

にやりと不敵に笑った男が、その銀の剣をすらりと取り出した。吸血鬼封じの印を持つ、退魔の銀剣だ。

「クウ……」

頼るしかなくて、トイは相対するクウの横顔を見る。

その横顔は、未来に何の迷いもない。

ZERO 4話

何の躊躇いもなく横に振り払われた剣を、子供は軽々と宙に飛んでかわす。くるりと一回転して背後に着地した子供に口笛を鳴らし、ザインは振り向いて剣を構え直した。

「すばしっこいなア。でも逃げてばっかじゃ捕まっちゃうぜー？」
軽口を叩きながら再び子供に剣を振り下ろすと、子供はそれを難なく避ける。そのまま、閃く剣の切っ先をひよいひよいと、最小限の動きで交わしていった。

（このガキ）

珍しい純血の子供が脱走を図ったと報告を受けたのは、ついさっきの事だ。圧倒的な強さで真正面からの強行突破を図り、既に地下室から洋館への出口の近くまでできているとの報せにザインは興味本位でここへとやってきた。

純血の吸血鬼は、強い。

強いという言葉が何を意味するのかわともかく、肉体的に考えるなら腕力、瞬発力、耐久力、全てが人間や人間と混血している吸血鬼に遠く及ばない。

それでも子供は子供でしかないのだ。

既に成人した、傭兵として雇われる實力を持ったザインに敵う子供など、例え純血の吸血鬼でもそうは居ない。それが常識というものだ。

いったん動きを止めてもう一度、剣を構え直したザインに子供が振り返る。息一つ乱していない。だが不満そうに頬を膨らませて両手首に嵌めている枷を見た。

「やっぱ動きにくいなあ、コレ」

「……吸血鬼封じの枷付けて、それか。お前一体何モンだ？ 名前は」

答えの代わりにあっかんべーをされた。

笑ったザインは、真剣にその子供を見据える。

「言っておくがオニーサン強いぜえ」

きよとんと一つ、瞳を瞬いてから、子供も不敵な笑みを浮かべる。

「じゃあ、レオより強い？」

「強い強い」

「ほんと？」

適当に答えただけだが、子供は目を輝かせた。子供の言うレオという人物と、自分が言うレオという人物は恐らく違う。それにも関わらず、ザインは更に適当に相槌を返してみせた。

「ほんとほんと」

「そつか！ じゃあいつくぞー！」

それは言葉が届くのと同じくらいの早さできた。

石畳の床を蹴り、一瞬で懐に入り込んだ子供がザインの手首を物凄い力で捻り上げる。顔を顰めるより先に、身体が宙に浮いた。

「なっ……」

空を飛ぶとはこんな気持ちなのかと呆けた思考になったのも刹那のことで、次の瞬間には鳩尾に鉄球をのめり込ませたような衝撃が走る。身体はそのまま横向きに吹っ飛び、壁に激突した。

「かはっ……！」

「あれ？」

とんでもないスピードと力で自分の鳩尾に拳を喰らわせた子供は、壁から床に崩れ落ちたザインに大きな瞳を何度か瞬いた。吃驚したと書いてある顔は、即ちこんな程度でザインがやられるとは思っていなかったという意味だ。

（肋骨、折れたな。——クソ）

唇の端を持ち上げて、ザインは上半身を起こす。びきびきと全身に痛みが走った。

「レオより全然弱いじゃん、うそつきだ」

ザインの気も知らず、子供がむくれた顔で非難する。それに対して、ザインは負けずに笑った。

「……ッ嘘は、言つてねえぞ。オレはお前が言ってるレオとかいうの、知らねーからな。オレが言ってるのはお前とは別のレオなんじや、ね？」

「あ、そつかあ。ちゃんとやってくんないと分かんないよオレ、間違えちゃったじゃん」

何とも間抜けな会話に、ザインは声を出して笑う。笑えば身体に痛みが響く。これほどのダメージを瞬時に回復するには血が必要だった。だが、生憎手頃な人間は見当たらない。

「ク、クウ！ 大丈夫なのか？」

「ん？ うん、へーき。トーイも怪我、ないか？」

「オ、オレは……見てただけだから」

恐るべき力を持つその子供の名前は、クウというらしい。呼吸を整えて、ザインは顔を上げる。

「大丈夫なら、早く行こう。また何かくるかもしれないし」

「うん、分かった」

そのままザインを放って駆け出そうとする背中に、ザインは思わず声を掛けた。

「待てよ、ガキども。出口にはロックがかかってるぜ。——それにお前らに帰る所なんかないだろう」

一緒に逃げ出したトーイという子供を、ザインは知っていた。人間と吸血鬼の混血児だ。親に売られるような形でここに放り込まれた子供だった。恐らく、二束三文のはした金で。

ザインの指摘に思う所があったのか、トーイの足が止まる。それにつられて、クウの足も止まった。

「トーイ。逃げて、どーすんだ」

「……それは、その……」

「身元不明の子供二人で逃げ出して、何とかなる程甘くねーぞ世の中。この町を飯に出られたとしても、これから先どうやって生きていく。結局ロクな事にはなんねーのがオチだ。ここと大して変わりがしねえよ」

背中を壁に預けて、ザインは煙草を取り出す。煙草に火を点けるだけの時間分、トーイは何も答えなかった。答えられなかったのだろつ。

人間の子供はいい。そこそこに保護される体制が整っている。だが吸血鬼の子供は別だ。そもそも不老の吸血鬼には子供を残す、育てるという概念がないに等しい。そんなものを考慮しているのは、せいぜい始祖の直系血族の十三家くらいだろう。あそこには純粋な吸血鬼の血を絶やしてはならないという考え方があるらしい。

だがそれも、百年に一人子供が生まれれば十分といった程度の筈だ。

吸血鬼は孤高の、誇り高い生き物。それは遺伝子レベルで組み込まれた、吸血鬼が吸血鬼であるが故の思考といって差し支えない。

「ほんととどーにもならねえって、分かってんだろ。……頑張つて抵抗するだけ、むなしーただけだぜ」

吐き出した言葉は、ザインの自嘲だった。

「クウ。お前もそうだ」

黙り込んでしまったトーイを心配そうに覗き込んでいるクウが、顔を上げた。真っ直ぐな瞳に歪んだ笑みを浮かべながら、ザインはその未来を予想する。

「純血でも紋章がなければ行き先なんかないの、分かってんだろ。いくら強くても帰る所はない。逃げてそれから、どーすんだ」

「そんなの、まずここのヤツら捕まえるんだ!!」

胸を張って断言され、ザインもトーイも言葉をなくした。だがクウはさも当然のことと、指折り続ける。

「で、ちよつといっぱい色んなもの探さなきゃだめなんだ。それからエルを……そーだオレのけーたいどこだよっ! あれなくしたら怒られるんだぞ!」

「お前」

改めて、ザインはクウをまじまじと見た。金色の髪、純血を示す藍色の瞳。けれど首元に紋章のない吸血鬼の子供。

だが強い。

漆黒の衣服に身を包み、何も恐れない。

「……地元の警察はこの館の主とは繋がってる。下手にここから逃げ出したら犯罪者扱いだ。それでもか」

「あ、そーかけーさつも捕まえるんだつた」

迷いもなく一刀両断され、ザインは詰まる。それから爆笑した。いきなり笑い出したザインに、クウもトーイもきよんとする。

それからクウが不気味そうに眉根を寄せた。

「へんなヤツ……いいや。トーイ、いこ」

「まーてよ、チビども。さっき言っただろ、この先の出口にはロツクがかかっている。いくらクウの馬鹿力だろうが吹き飛ばすのは難しいぜ」

「やってみなきゃ分かんないじゃん」

「まーそりゃそうだがな、ちったあ頭使えよ。……オレはパスワードを知ってる」

クウが先を急ごうとした足を止めた。振り返ったクウに、ザインはニヤリと笑う。

「幸運な事に今は好都合な事情もある。……一暴れすれば、それだけであの色欲魔なジジイを捕まえられるかもしれないねえ」

「幸運なつて……」

「それはナイショだトーイ。ま、オレももーそろそろこことはオサラバしようかなと思ってた所だしな。……子供を売り物にする商売は向いてないみてーで」

トーイの疑問には答えず、ザインは立ち上がる。先程よりまだ身体は動く。煙草一本分の休憩時間は終わった。

「どうするお前ら。オレの作戦に、のつてみるか？」

「そ、そんなの信用できる訳が」

「クウについてきやそりやここから逃げ出すことは可能だろうよ、トーイ。だが犯罪者扱いになる。あのクソジジイをぶつ殺しても同じことだ。——厄介なことにそれはオレも同じでな。だから協力し

ようつてオハナシだよ」

言い募ろうとしたトイーに対して、クウは何も答えずじっと考え込んでいた。

「言っておくがオレの作戦にのらないならパスワードは教えない。それにクウ、お前トイーをまた人質にされたらどーするつもりだよ。そもそもそれですつ捕まっただんろ」

トイーが驚いてクウを見る。しかしクウの強さを考えれば納得のいく事だったのか、何も口にはしなかった。

「……それともオレを拷問してパスワード吐かせちゃう？」

クウの瞳は、ザインの挑発にも揺るがなかった。

だがパスワードは必要なのだ。ザインの話にのらないならば、パスワードは穩便に手に入られない事になる。

「……どんな悪いヤツでも、必要以上に殺したり酷いことするなっ言われた。半殺しならいいって言われたけど、オレ加減あんまり分かんないし」

静かに、クウが呟く。その内容は些か物騒だったが、ザインは口を挟まずに先の言葉を待った。

「ほかのひとを信じるってことは、自分でセキニンをもつてことなんだって。それもまだ、よく分かんない」

クウが顔を上げる。そしてじっと、瞬きすらせずにザインを見つめる。

「ザインにーちゃん。パスワード、教えて」

それは強い意志の現れだ。

クウが何をどう頭の中で整理したのか、ザインには分からない。それでも、それはこの子供のとった選択には違いない。

「……オツケー」

その選択に、ザインはあやかる。それは期待だったのかもしれないし、意地の悪い賭なのかもしれない。

だが久し振りの子供のような高揚は押さえきれず、自然と口元が緩んだ。

ZERO 5話

くと服の袖部分の匂いを嗅いだクウが、すぐに顔を顰めた。苦笑したザインは銃を構え直し、声を潜めて話しかける。

「動物がお前。大人しくしてろよ」

「何だよこれーヘンな匂いがする。それになんで風呂入って服着替えなきゃなかったんだよー」

ザインは一度、トイとクウを地下牢に戻し、無事捕獲したという形をとった。そして地下牢にトイを残したまま、クウを連れ出したのだ。

香を焚いた風呂に入れ、たっぷりと香油を全身に塗り、服を着替えさせる。そして、洋館の主の前へと連れて行く。その意味をトイは理解したようだったがクウには分からなかったようだ。

「いいか、ちゃんとやれよ」

「わかってるよっ」

ぷいと顔を背けたクウはまだ顰めっ面だ。どうやらこの匂いがまだ気に入らないらしい。

（オコサマだなあ）

子供に欲情する趣味はザインにはない。けれど、やや不機嫌ながらも頬を紅潮させ、いい匂いを振りまいているクウは、流石純血の子供だ。金色のさらさらした髪も、大きな藍色の瞳も、滑らかな肌も、必ずあのメタムの目にとまる筈だとザインは踏んでいる。現にクウをそう仕上げると命じたザインに、まだ身元不明の子供なのだからと誰も異を挟まなかった。誰もザインの判断に疑問を抱かなかったという事は即ち、稚児趣味を持つ主人がクウに目を付けると考えていたという事に他ならない。

ならばザインの読みが外れる確率は、果てしなく低い。

クウの背中に銃を突き付け、前へ進めと促す。じゃらじゃらと新しくはめ直された鉄の鎖が嫌な音を立てた。それでも凜と真っ直ぐ

に、背筋を伸ばしてクウは開かれた扉をくぐる。

その先ができるならば希望という名前ならいい。そう子供じみた願いを抱く自分が少し、おかしかった。

「ふむ、話は分かりました。この子供は単なるお人形として扱うには勿体ないと、そういうことですね」

冷静に頷きながらも、遠慮も何もなく真正面から睨み付けてくる子供をメタムは上から下まで検分していた。胸の中でそれを訝りながらも、ザインは全く表情には出さず、主人に説明を補足する。

「はい。子供ですが、オレを手こずらせるくらいの力はあるんで。売り飛ばして取引先ともめても問題ですし、ま、下手に売って後で身元が分かったなんてトラブルにもなりかねませんしね」

「——それで、君はトイーという少年を助けてやったなら大人しく従うと？」

「そうだよ。だからトイーに酷いことすんなよな!」

「なるほどなるほど。約束しよう」

満足そうにメタムは笑う。裏では何とでもなると考えている顔だ。それをザインは読み取るが、今はそんなことはどうでもいい。

「でもねえ、もうトイーを解放してやることはできないよ。ただ君のお付きにしてやることはできる」

「おつき……って、ナニ？」

こんな時でもきょとんと振り向かれ、ザインは呆れる。

「まあオトモダチって事だよ。お前の」

「……ふうん？ 何かよく分かんないけど、ひどいことしないならそれでいい」

「なら、決まりだな。君は私と契約することになる」

「ケイヤク？」

「約束ということだ。……それにしても、純血の家無しか。——う

む、こうしよう。君には、帰る家がないだろう？」

クウは答えなかった。それを肯定ととったメタムは、頷きながら猫撫で声を出す。

「だから君に帰る家をあげよう。君と私は今から親子になるんだ。

形だけでもこうした方が、安全だ。君と私が対等であるという、私
なりの誠意だよ」

「……親子？」

「そう。君は私の息子になるんだ。パパと呼んでくれて構わないよ」
「気持ち悪いからヤダ」

間髪入れずのはっきりした拒絶に、思わずザインは吹き出し、メ
タムはやや笑顔を引きつらせた。だがその所為で、メタムの笑った
瞳の奥に、妖しい色が広がる。

「……そうか。まあいい、これから少しずつ仲良くなっていくうじ
やないか。クウといったね、クツキーは好きかな」

「すき！」

喜んだクウは演技ではなく、恐らく素だ。些か不安を覚えるが問
題はない。現にメタムは満足したらしく、使用人に声をかける。

「この子にクツキーと、何か甘い飲み物を」

「あ、でもトーイはどーすんだよ！ 約束は」

「君の部屋を用意しよう。そこにトーイを案内してやるといい。ザ
イン、任せたぞ」

「りょーかいっす」

「ほんとだな！？」

「ああ、可愛い息子に嘘はつかない。ザイン、頼んだよ」

大きく頷いたメタムは一見、優しい父親に見えなくもない。クウ
が騙されてしまうこと、そしてこのままメタムがクウにとって良き
父親となる万が一の可能性が脳裏を掠める。だがメタムはクウから
一度も視線を反らしていない。恐らく、ザインの思惑通りになる筈
だ。

腹を括ったザインは頷く。

「わーっかりやした。じゃ、お暇した方がいいですかね」

「ああ。ご苦労だった」

最後にクウを見る。だがクウはこちらを見ていない。

（ああもう、何でこんなのアテにしたかな）

それでも一度賽を投げたなら、後は転がるまでだ。

クウを残して部屋を退室し、ザインは主人の命令通り、トイの扱いについて指示する。

そしてそのままの足で、東の客室へと向かった。

静かな夜を、懐かしく思った。だが椅子に腰掛け目を閉じて堪能していた時間は、ノックの音で破られる。

「――何だ」

「失礼しまあーっす。オレをお呼びだつて聞きましたがあ」

許可もしていないのに相手はずけずけと扉を開け、入ってきた。

無礼な態度にエルは目を細めたが、咎めることはしなかった。

「純血の家無し吸血鬼をお探しだつておハナシで。ザインっていますヨロシク」

「お前じゃない」

素っ気なく返すと、ザインと名乗った男が目を瞬いた。肘掛けで頬杖を突き、エルは足を組み直す。

「下がれ」

「――うっわあ冷たいたいどー……さっすがお貴族様」

始祖の直系と言われている十三の家柄を持つ純血の吸血鬼を揶揄る言葉にも、エルは眉一つ動かさなかった。それが気に入らなかったのか、ザインの顔にわずかな悪意が宿る。

「庶民の言葉なんてお耳にも入らないってか」

「お前に用がないだけだ」

嘆息し、エルは組んだ足の上に手を乗せる。そして不愉快だと全

身で語りながらも部屋を出て行こうとしない男に問いかけた。

「それとも、お前がオレに用があるのか？」

「……べえつつにい。お貴族様は気楽でいいねえ、仕事もせずに弱い子供やらが必死で働いてるってのになあ」

エルは答えない代わりにようやくザインに目を向けた。同じ藍色の視線が交差する。同じ、純血の吸血鬼だ。

「ちゃーんとお仕事してもらわなきゃ困るってな。そういうのって吸血鬼の誇りとかいうのに反するんじゃないかねえの？」

「馬鹿馬鹿しい。嫌味が用件ならさっさと出て行け」

「聞く耳もたないってか。そうやってお高くとまっていればいいヤツは、幸せだよな」

「何を勘違いしてるのか知らないが、自分のことは自分でやれ。それとも何か助けて欲しくて物乞いにでもきたのか」

ザインが返事に窮したようだった。それを冷めた目で見たエルは、椅子の傍にあつたテーブルから冷めた紅茶を取る。

「誰も助けてくれないと、叫ぶことは簡単だな。つまりお前はまだ誰かに助けて欲しい子供って話なのか？」

「……」

「紋章が首元にあつたなら人生が変わったと、そう言いたいならお門違いだ。そんな他人任せの思考回路じゃ大して変わらない人生だろうから、安心して今を謳歌してろ」

「——それを……お前が、言うな。お前に何が」

「何にも分からねえよ、当然だろう。お前がオレを分らないようにな。——不幸自慢をするなら余所をあたれ。用件があるなら早く言え」

情緒も何もない切り捨て方に、呆然としているのはザインの方だった。だが悔しそうに目を伏せた後、ザインは笑う。

「あー……まあ、そうだな。今夜、ここで騒ぎが起きる。それを知っておいて欲しかったただけだ。ぐっすりおねんねされてちゃ、困るんでな」

「成る程、気に入らないヤツでも持っている権力は使おうという話か。プライドのない奴がよく使う手段だ」

「――お褒めにあずかりども」

惘然としてはいるが、どうやら反論する程馬鹿ではないらしい。何を企んでいるのか知らないが、エルはもうこの件に関して積極的に動く気がなかった。恐らく騒動は向こうからやってくると思っている。

それと照らし合わせれば、この男の企んでいることがそれなりに見えるというものだ。気は進まなかったが、確認してみるのも手かも知れない。

「この屋敷に、純血の吸血鬼は居るか」

「は？ いや純血の吸血鬼は」

「家無しの子供だ。ものつすげーバカで小さい癖にやたら馬鹿力のある」

素っ気なく尋ねると、ザインは瞠目した。何かに気付いたようだ。

「……お前、名前……なんて言ったっけ」

「エルファード・インテグラ」

「……エル？」

「気安く呼ぶな」

その返事に、ザインは何かを確信したらしい。一息飲んで、身を乗り出した。

「お前ひょっとしてクウって子供を捜しに来たのか!？」

その名前に、エルは頭痛を覚える。額に右手を添えて深々と溜め息を吐くと、立ち上がった。

「冗談じゃない、誰があんなガキ探すか」

「でもお前」

「それより答えろ」

もう何もかもが面倒で、エルは銃を引き抜く。銃口を向けられザインは腰の剣を抜く間もなく、身体を硬直させた。

「あんなアホに何をさせる気だ」

しかしザインが答える前に、廊下がざわめき出す。

どうやら既に厄介事は突き進んでしまったようだ。そもそもあの子供が行方不明になった時点で覚悟すべきだったのかもしれないが、それを反省する気などエルには毛頭無い。

仕方なく、エルは銃を下ろす。そして目線でザインに問うと、ザインは驚いた表情のまま何度も頷いた。

舌打ちしてから、エルはそのままザインの真横を通り過ぎた。ドアノブを回す音を聞いてから、ザインが振り返る。

「ちょ、ちよつと待てよ！」

「何だうつせーな邪魔すんなら公務執行妨害で現行犯逮捕すんぞ」

「お前、クウの保護者なのか？」

「誰になるか、そんなモン」

これ以上答える義理はないと、エルは部屋の外に出る。騒ぎはどうやら館の中央広間で起こっているらしい。

歩いて進むエルの後ろを、黙ってザインが着いてきている事に気付いた。だがエルは歩調を緩めることも早めることもしない。

本当は無視しても構わない。クウは先月、修習期間を終えて正式にヴァンパイア特務機関SSランク所属捜査官に就任した。馬鹿は馬鹿なりに、自分で何とかする力を持っているのはエルも認める所だ。

（誰も助けてくれない、か）

クウは助けてくれなんて、言わない。

ただ、パートナーになるんだなんて寝言を、真っ直ぐに笑うのだ。

ZERO 6話

クウがすべきこととして、言われたことは少ない。

一つはまず、ザインに捕まったという形をとって洋館の主人に会うこと。誰それ、と聞いたならラスボスだと答えられた。

次に、その主人と二人きりになるから、大人しくしているとされた。何でと聞いたなら、エサだと答えられた。

更に、二人きりになってクウの服を脱がし始めたら十以上数えてから、物凄く手加減して殴れと言われた。何で服を脱がすんだと聞いたなら、変質者だからと答えられた。

（よく分かんない）

クッキーを頬張り、アプリコットのジャムが入った紅茶を飲む。

食べ物に縁がなかったクウは、特にお菓子のような甘いものに目がない。味覚がないと言われる程食べ物に貪欲なクウだが、紅茶はエールが淹れてくれたものの方が美味しいかなと思った。

「おいしいかい？」

「ん」

クウのがつつきぶりに最初は驚いていたこのメタムとかいう脂ぎった初老の男は、ようやく気を取り直したようだった。

クッキー以外にも気を利かせた使用人が紅茶に合わせてかスコーンを置いていた。クッキーを頬張って落ち着いたクウは、スコーンとその傍にある蜂蜜が入った容器を引き寄せる。このスコーンとかいうものは、そのままでも良いけれどジャムや蜂蜜をつけて食べるものだと教えられた。だからスコーンの上に、たっぷりと蜂蜜をかけてそのまま手で掴む。

「……品のない食べ方はよしなさい」

「む？」

スコーンに齧り付いたままテーブルの真向かいに座っているメタムを見ると、顔を顰めていた。別にこの男が呆れても何ら関係ない

と考えているが、手で何でも驚掴みにしてもものを食べてしまうクウを、エルもそんな顔で見ていた気がする。

ただその目の奥にあるものが、この男とエルでは根本的に違う気がした。

目が合ってから、クウは意識したメタムの視線に嫌悪感を覚える。ただメタムはクウを見ているだけだ。だが這うような視線が、気持ち悪い。

（……なんだろ）

殴るのは、服を逃がし始めてからだと言われた。だから我慢する。けれど服を脱がされなかったら、今晚どうすればいいのだろう。

「蜂蜜がついてしまったね」

手を止め、スコーンを更に戻したクウにメタムが微笑んでみせた。気味の悪い微笑み方に、クウは顰めっ面で返す。だがメタムはそれを意に介さず、立ち上がってクウが腰掛ける椅子の後ろに移動した。そして蜂蜜だらけのクウの手を取り、フィンガーボールにその指をひたし、ナプキンでゆっくりと拭く。

その動作が子供の柔肌を確かめる男の仕草なのだと、クウは分からない。けれど毛虫が這うような悪寒が、メタムの指先から伝わるのだけは、分かる。

（な、殴っちゃだめかな）

必死でその手を振り払い拳を作るのを耐えていた。そのクウの我慢を、メタムは緊張していると考えたらしい。

「そんなに怖がらなくても大丈夫だよ」

「……っ」

怖がっているんじゃない我慢しているんだと叫びたかったが、それすら押し殺す為にクウはぎゅっと目を閉じ身動きしないという行動をとった。それをメタムは都合良く解釈する。ずっとクウの両脇に手を差し入れ、軽い体を抱き上げた。

「クウ、だったね。いくつかかな？」

「……きゅ、うさい」

すとなんと、ベッドの縁に座らされた。見上げたクウと目が合うより先に、メタムの手がクウのシャツのボタンにかかる。

ぎよつとした後に、クウは目を瞑った。

「私達はもつとお互い仲良くなる必要がある」

いつもは早いその秒数が、やけに遅い。

「いいかい、今日の所は私の言うことだけきいていればいい。何も考えず、大人しくしているんだ」

分らないし分かりたくもない。それにクウの周りの大人達と、言っている事が全然違う。自分で考えろと常に言い聞かされている。それ以上に大人しくしろとも、言われているが。

首筋を噛まれるのかと慌てたが、舐められたただだった。それでもぞおつと鳥肌が立つ。

「良い子にしていなないと、痛い目を見るのは君だからね。――勿論、トイもだ」

その卑怯な言葉と十という数字が重なったのは、クウにとっては有り難い事だった。首筋に顔を埋めている男の腹を蹴り上げると、カエルが潰れたような声が響く。

それでも思い切り、手加減したつもりだ。本当は力の限りで殴つてやりたかった。

だがザインに言われた事を忘れてはいない。悶絶したメタムの横を通り過ぎ、部屋の出入り口である扉のノブを回した。だが、開かない。鍵がかかっているのだ。

「――ムダ、だ。良い子だから、こっちにきなさい」

腹を抱えつつもメタムが起きあがる。もう少し力を込めてやっても良かったようだ。

「いいかい、クウ。約束しただろう。君が逆らうなら、トイは」
メタムの言葉はドアノブを引っ抜いた音で遮られる。啞然としているメタムを放って、そのままクウは扉を蹴り飛ばした。

「な……」

外に控えていた部下も、メタム自身も呆然とその様を眺めていた。

その間に振り返ったクウはメタムの首根っこを乱暴に掴む。

「な、な、な……クウ、何を」

「トイもその他の子達も全部、外に出してあげるんだ!」

「お、おいお前達! この子供を止める!」

主人の声に我に返った部下が、銃を構える。それより早く、その身体をクウが蹴り飛ばした。

「ひ——」

そのままずるずるメタムの身体を引きずりながら、クウは外へと出る。廊下にはドアの壊れる音に人が集まりだしている。

東だ。その方向に向かえと言われた。

首を巡らせたクウはしばらく考え込んで、メタムをぐいと持ち上げる。そして真剣に問いかけた。

「ひがしって、どっち?」

中央広間の玄関が派手な音を立てて開き、物々しく警官服の男達が入ってくる。足を止めたエルは、その警官達が向かおうとしている先に視線を向けた。シャンデリアを囲むように曲がりくねった階段の上だ。

「おい、何の騒ぎだ」

「は——はっ」

その一人の肩を捕まえ、エルは銀のロザリオを翳す。ヴァンパイア特務機関の捜査官である事を証明する銀のロザリオを見た警官は顔色を変えて敬礼した。

「通報が入ったばかりで詳しい状況は分かっているのですが、領主に何かあったらしく」

「……そうか。いい、行ってくれ」

「はっ」

もう一度敬礼して、警官は慌ただしく階段の上へと向かう。嘆息

したエルは煙草を取りだして火を点けた。

「おい、お前は行かねーのか？」

答えずに、目線を落とした。ザインの足元に鼈甲色の髪の子供が
すりついている。エルの視線を受けて、脅えたようにザインの後
ろに隠れた。

「……その子供は？」

「——さあな。お前が調べる事だろ」

それなりに妥当な意見ではあったので、エルは何も言い返さな
かった。その頭上で、騒ぎの声が大きくなっていく。

「止まれ止まれ！ 人質を解放しろ！」

「だからっオレはトーイとか他の子達を外に出してやれって言っ
ただけじゃんっ！」

「や、やめるんだ。きちんと話をしよう」

「止まらないと撃つぞ！ これは警告だ！」

「やめる撃つな私に当たったらどうするんだ！」

随分にぎやかな行列だ。騒動の中心に気圧されたのか、警官が後
退する。

（……情けない奴らだ）

だがそれも致し方ないのかもしれない。エルでさえ頭痛がする展
開だ。

いつそのまま知らんぷりで屋敷から出てしまおうか、と思った。
だがそんな事をすれば最後、どれだけあの先輩方に罵られるか分か
ったものではない。それにここまでお膳立てされた以上、クウ一人
での解決は恐らく無理だ。

「この子供は純血の吸血鬼だ！ 各自油断するな！ おいザイン隊
長を呼べ！」

「……お呼びだぞ」

興味なさげにそう告げると、ザインが笑った。そしてそのまま子
供を置いて、階段の上を目指す。

不意にエルの服の裾が引かれた。目を向ければ、ザインに置いて

いかれた子供が見える。

「あ、あのさ。信じて、もらえねーかもけどっ！——この領主、サイターなんだ。ひでー奴なんだ。クウは何にも悪くないんだ、助けてくれようとしただけなんだ——オレが、巻き込んだだけなのに」

「……」

恐らくこの子供は重要な証人になる。年齢はネックだが、子供だからと切り捨てることはできない筈だ。

冷静に考える一方で、自分に縋る手の小ささを思う。クウの手はこれよりも、小さい。

「オレ、逃げようとしたけどダメだった。オレより小さい子供も、いっぱい居るんだ地下に。アンタ、ヴァンパイアなんとかっていう、エライ奴なんだろ。助けてやってくれよ」

黙ったままのエルに怯むことはなく、ただ子供は俯いた。

それ以外に方法がないのだと、か細い声が懇願する。

「——助けて、くれよ」

悔し涙を浮かべる子供をエルは黙って見つめる。

そして短く息を吐くと、中央の広間に向かって歩き出した。

「あ、あの」

「その悔しさを忘れるな。自分を助けてくれるヤツは、自分しかない」

そしてエルは顔を上げる。

ようやく中央広間まで辿り着いた諸悪の根元を絶つ為に。

インテグラ家のお坊ちゃんとくれば世間知らずで正義感に溢れているだろうから勝手に飛び出してくれるかと思ったのだが、どうやらザインのアテは外れたらしい。この騒ぎに乗じて、クウの話を聞かせるのがザインの目的だった。

クウは既に被害者だ。

それに子供とくれば、ほだされやすい。クウに傾きやすくもなる。その為にトーイも連れ出した。そんな風に、物事を計算していた。だが相手は簡単に引つ掛かってくれはしなかった。

（さてどー転ぶかね）

ただ、利用しにくい相手ではあったが不快ではない。

惨めに顔を歪ませたメタムが、ザインの顔を見付けた瞬間に更に顔を歪めた。はっきり言つて醜いのだが、そこは我慢する。

「おおザイン！ 早く助けてくれ！」

「へーイ、お仕事ですからねー」

といつてもクウと戦う気はザインにはない。戦いたくないというのが本音だ。クウは再び両手首両足に新しい枷と鉄鎖を付けられてはいたが、そんな常識が通用しない相手だと思ひ知っている。

ザインの姿を見たクウがむっと眉根を寄せた。

「何だよやっぱりお前敵なんじゃん！」

「いーやあ、今はオレよりもすげーのが居るぜ、クウ」

そう言つて、階段下を指さす。クウの保護者だと、エルは認めなかった。だがエルとクウは何らかの形で関係がある筈だ。それは嬉しい誤算だった。

だが釣られてエルに目を向けたクウは、怯んだ。

その反応は想定外でザインが目を睜つた瞬間、銃声が響く。

（な——）

騒がしかった広間が、一斉に静まり返った。

弾はクウには当たっていない。だがクウとメタムの隙間を綺麗に縫つて、白い壁にめり込んでいた。

呆然としたまま、ザインも、騒いでいた警官も、そしてクウも、全員が銃を撃つた男を見下ろす。

「——茶番は終わりだ」

銀色の髪と銀色の銃を持った男が、酷く不愉快そうにそう言い放った。

ZERO 7話

静まり返ったその場で、まず声を上げたのはメタムだった。

「お、おおインテグラ捜査官！ 実はですな、この子供は」

どうやら言い逃れを考えているらしい。そもそもヴァンパイア特務機関に出てこれられては痛い懷を、メタムは持っている。だがそれをクウの怒鳴り声が遮った。

「何だよ何すんだよ当たったらどーすんだよっ！」

「外してやっただろう。それに大体、どう見たってお前が悪者だ」

「へ？」

きょとんとクウが瞳を一度、瞬いた。嘆息したエルは銃を構えたまま面倒そうに言い放つ。

「人質とつて大騒ぎして、何してる」

「オレ人質なんかとつてないよ」

「じゃあこの状況は何だ」

「地下にいつぱい子供が居るんだよ。外に出してあげるんだ、これっていい事だよな？ オレもなんか変な事されたし」

エルの視線が、メタムに移る。慌てたメタムが声を張り上げた。

「こ、子供の戯れ言です！」

「ならその鎖は何なのか、ご説明頂けますか。ただの子供にするには大仰な吸血鬼封じの枷みたいですが」

「それは子供とはいえ吸血鬼ですから……！ それにこの子供はウチで雇っている者で、恩も忘れて私にこんな仕打ちをですな」

「雇ってるね。……ヴァンパイア特務機関では二重労働は認められてないぞ、クウ」

言い募ろうとしたメタムが、何かに気付いたのか目を白黒させた。ザインもまじまじとクウを見る。

エルとクウに何らかの関係がある事は、気付いていた。だがエルの意味する所はつまり。

「何だよそれ。そっぴや仲良くなろうとか親子になろうとかけーやくだとか言われたけど……服脱がされるのが今回のにんむだったのか？」

メタムの言い訳が響く前に、エルの冷たい視線が飛ぶ。それにもめげず、メタムは作り笑いを浮かべた。

「いや、ですから、ですな。この……子供は……」

それでも何か引つ掛かったように、クウとエルを交互に見る。

「残念ながらメタム領主。事情聴取させて頂く事になりますね」

「は、な……こ、こんな子供の言うことなど」

「とても残念なことに、そのガキはオレと同じなんですよ。バカなんで、銀のロザリオは落としたみたいですがね」

エルの言葉にクウが小さく、何で知ってるんだと呟く。その顔は悪戯がばれた子供そのものの態度だ。

けれど、その落とし物の中身は。

はっと、トーイが自分のポケットをまさぐる。銀の十字架。それに覚えがあった。

（まさか）

掴みだした、銀色の十字架の裏に、何か刻んである。細かく長い文章を読み解く事は、文字に疎いトーイには難しかった。

けれど、確かにその、字面の最後に。

「ご、ご冗談を。こんな子供がヴァンパイア特務機関などと、インテグラ捜査官。証拠もないのに信じられない話ですよ。私を陥れる為に吐く嘘ならもつとまともな」

「——ゼクウ」

トーイの声は、驚く程よく響いた。皆に注目されているとも気付かず、トーイはその銀の十字架を、クウに向かって見せる。

「クウ——これ、お前の、なのか？」

「あーあったー!!」

顔を輝かせたクウがそう叫び、階段上からトーイの真正面まで軽々と跳んだ。

呆然としたトーイはそのまま手を差し出したクウに、銀の十字架を渡す。

「——これで納得したか？ このガキの証言は、軽くないぞ」

一連の流れを見ていたエルが、メタムに確認した。図らずともクウに解放されたメタムは階段下を恐る恐る見た後、顔つきを変える。目を細めたエルはそれを見逃さず、銃を構え直した。

「——なら……残念なことに、インテグラ捜査官。その子供共々、生きて帰す訳にはいかない……！」

主人の判断に周囲が反応するのは、早かった。ぐるりと囲まれる形になったエルに、メタムは引きつった笑い声を上げる。

「いくらヴァンパイア特務機関とはいえ、これだけの人数に囲まれでは生きて帰れないでしょう。その坊やも同じことだ」

「……やられ役の典型的な考え方だな、馬鹿馬鹿しい。——クウ！」

答えるのではなく、クウは跳んだ。煌めくシャンデリアの前で綺麗に弧を描き、そのまま数人、警官を蹴り飛ばす。エルが銜えていた煙草を床に落とし、赤い絨毯の上で踏み潰す。同時に階段の方向へ銃口を動かした。

「う、——うああっ！」

「何をしている！ たった二人だぞ一斉にかかればいい！」

メタムの声が飛ぶ間も、クウが容赦なく数人壁に叩き付けていた。エルも至近距離の人間は蹴り飛ばしながら、銃声を響かせる。

「おい、トーイこい！」

混乱し始めたその場で呆然と立ったままのトーイの腕を引っ張ったのはザインだった。驚いて顔を見上げたトーイに、ザインは笑う。「今の内に地下牢のガキども助けに行くんだよお前も来い——早く！！」

トーイとザインの背中がこの場から遠ざかるのをエルは横目で確

認していた。そういう事かと鼻を鳴らし、眼前の敵を撃つ。急所は外してある。

吸血鬼も混ざっているようだが、大した力の持ち主は居ない。この状況では加減を知らないクウが必要以上の死者を出さないかどうかの方が心配だった。

（——さっさと終わらせるか）

恐らく地下に居るとい子供を、ザインとトイは助けに行っただろう。例えエルとクウがやられてしまっても、この状況に乘じて子供達だけでも逃がす為に。それを考えれば待つてやつても良いのだが、クウが死人を出した後始末の方が自分にとっては面倒だ。

勿論、多勢に無勢のこの状況と犯罪者である相手の事を考えれば、多少の死人が出て問題はないだろうが。

「バカガキ、殺すんじゃねえぞ！」

「わっ分かつてるよっ」

どうだか、と胸中で呟いてエルは床を蹴る。ふわりと飛んだ男の影を、数名が呆然と見上げた。

「ひ——ひいっ」

自分に向かって飛んできた男に、メタムが尻餅を着く。眉一つ動かさず、エルはその這い蹲った惨めな男に銃口を突き付けた。

「あつけないゲームオーバーだな。全員、動くな！」

主人に銃口が向けられた事を理解した部下達が、動きを止める。

警官達も同じだ。

それを確認したクウも、構えを解いた。

「クウ、逃げだそうとするヤツは全員捕まえるよ。——午前一時十八分、現行犯逮捕する。ここに居る全員だ」

「そ——そうだ。インテグラ捜査官、君に」

「取引には応じない」

冷たく言い放ったエルに、悲鳴のような声を上げてメタムが縋った。

「あッあの子供は私の子供になる！！　ヴァンパイア特務機関に居

るとはいえどうせ純血の吸血鬼だ、引き取り手もないんだろう！」

初めて表情を動かしたエルに、メタムは何かを勘違いしたらしい。猫撫で声で、更にエルに哀願する。

「他の子供達もそうだ。帰る家などない子供達ばかりだ。私が引き取る！　それでいいだろう、私を捕まえてもあの子達には帰る家も保護もない、むしろ生きていく術を失われ野垂れ死ぬだけだ！　あの子達が可哀想だと思うだろう、なあ——う、ぎゃああっ！」

銃声が鳴った。右肩を撃たれたメタムが、床に蹲る。

脂汗を掻き、ひいひいと情けない声を上げるメタムをエルは軽く蹴った。ごろりと肥えた腹を晒け出して、メタムが転がる。

「そ、捜査官がこんな事をして、タダですむと——」

非難の言葉は、恐怖に飲み込まれる。そのうるさい口に銃口を突っ込んで、エルは不敵に笑った。

「成る程、お前みたいな腐ったのが居るからあんなバカが出てくるらしい」

「う——うう」

「それでオレが迷惑してるんだ。助けてくれるヤツなんか一人も居なくて、そんな中でただ助けられたからと、それだけでバカみたい——」

真っ直ぐに。

疑うことも、迷うこともせず。

今度は自分が助ける番だからと。

——もう失ってしまった、自分に。

「——あのガキの引取先はもう埋まってる。その取引は、却下だ」銃口を引き抜き、エルは冷たく言い放つ。気絶せんばかりに顔を青ざめさせたメタムは震えて何も答えない。

「他のガキも、お前みたいなクズに良いように使われるよりまともな生き方をする筈だ。些細な事でも、誰かに助けられたことを忘れ

ないならな」

「……」

「全員、手を上げる」

エルの言葉に、顔を見合わせながらも広間に居る人間も、そして吸血鬼も、その両手を上げた。抵抗の意思はないらしい。

「……エル」

いつの間にか階段の踊り場まで上がってきていたクウが、エルの背中に声を掛けた。

振り返るエルを、酷く情けない顔つきで見上げている。その期待に応えるべく、エルはクウの頭のとっぺんに拳を落とした。

「つてえー！ まだ何にも言っていないじゃんかあ！」

「言わなくても分かる。ロザリオ落として現場放棄して何訳わかんねーことやってたんだお前は！ 携帯と制服はどうした！」

「け、ケータイとせーふくは落としてないよ！ とられたんだもん！」

「一緒だろーがバカか貴様！！ どうせロザリオ落として名乗るに名乗れなくてとっ捕まって取り上げられたんだろーが、ロザリオ落とさなきやそもそもこんな事になってねーんだよそれが分かんねーのかサル頭！！」

「で、でもでもっ見つかったからもっいいじゃん！！」

「いいわけねーだろお前ロザリオ落としたのこれで何回目だと思っ
てんだ！！」

「つたー！！」

もう一度同じ場所に拳骨をくらって、クウがしゃがみ込み悶絶する。そこそこすっきりしたエルは、ふんと鼻を鳴らして項垂れているメタムに手錠をかけた。

ミランダ警告を読み上げるエルの後ろで、クウがはっと顔を上げる。

「そーだトーイとかみんなはっ！？」

「無事だろ。お前は自分のケータイ探せ——認識IDJ700000

10531ヴァンパイア特務機関SSランク所属、エルファール・インテグラ。領主メタムとその部下、警官数十名を現行犯逮捕。至急応援を頼む。地元警察は犯行に関わっている可能性がある為、出動要請を禁じ、待機を命ずる」

携帯電話を切り、エルは冷ややかにクウを見た。

「セキユリテイ働いてシステムダウンしてるぞ、お前のケータイ。ちゃんと始末書書いて復旧手続きとれよ、オレは知らん」

「ええー！？ 誰だよさわったヤツ！ 人のケータイ勝手にさー！ なーおまえ、オレのケータイどこだよ！」

「わ、私の……へやに」

「えー？ またもどんなきやだめじゃん！ なあエル、これとって」
そう言ってクウがエルに向かって突き出したのは、吸血鬼封じの枷だ。鉄の鎖部分は先程暴れた際に千切れてしまったようだ、魔力が入ったものだけは物理的な力で壊せないのが通常だった。

「……こんな初歩の魔術も使えねーのか」

「のーこんだからお前はまほー使うなって言ったのエルじゃん」

それは確かにそうだったので、舌打ちしたエルは指先に宿らせた魔力でクウの身体を囲むように、円を描く。ぱりんとガラスの割れるような音がして、枷が粉々になって砕け散り、床に散らばる前に灰になって消えた。

「あーもうつつとっしかったー」

「吸血鬼封じくらい自分で破れるようになれば、学習しろ」

そうは言いつつも、クウが制御のきかない魔力を使おうものならとんでもない事になるとエルは一度目の当たりになっている。だから今の所は甘やかして、自分が何とかしてやるしかない。

「オレだってがんばってるけどさー……むずかしいんだもん」

「いーから携帯探してこい」

クウはまだぶつぶつとむくれていたが、エルに反抗するのを諦めて携帯電話を探し出す事にしたらしく元来た道に戻っていく。それを見送って、エルはやれやれと肩を落とした。

これで今回の任務は終わりだ。だが、メタムにああは言ったものの、捕らえられていた子供達の身の振り方は問題になるだろう。引取先など、容易に見つかるものではない。

そしてクウは。

(……めんどくせーな)

それでもあの瞬間に誰かに押し付ける事ができなかった自分が、何よりの答えになるのかもしれない。

そう考えると馬鹿馬鹿しくもなる。大袈裟に溜め息をついたエルに脅えたらしいメタムが、惨めに床の上で震えていた。

ZERO 8話

この町では見かけない顔が、あちこちにある。赤いランプをくるくると回した乗り物に脅える子供達を宥めつつ、その身柄を預け、ザインはトーイの手を引きようやく現場指揮官を見付けた。

一段落ついたのか、銀色の髪と紫煙を夜風に靡かせながら、エルが中央玄関へと続く階段に腰掛けて一服していた。

そのすぐ傍で、クウがハンバーガーを嚙っている。包みからはみ出たソースで手を汚したクウに、エルが何か言いながらナプキンを渡してやっていた。

その様子を見ていたザインに、何かがこみ上げる。切なさだろうか。ぎゅうつと、トーイがザインの手を握り返した。

「……何だ。まだ何か用か」

「あ、トーイ！ 大丈夫だったか？」

ハンバーガーを飲み込んだクウが、笑顔でトーイに問いかける。ちゃんと片付けるとエルに注意されて、ゴミ袋代わりらしいビニール袋にその包みを捨てて、口元と手をもう一度綺麗にナプキンで拭き取った。

「良かったな、これであそこにもう戻らなくていいんだぜ」

「う……う、ん」

答えるトーイの返事は、ぎこちない。クウがヴァンパイア特務機関という、自分とは違う立場に居る事に気が引けたのかもしれないし、——その横に居る男の存在に、劣等感を抱いたのかもしれないかった。

同じだと思っていたものがそうでないと知る瞬間は、辛い。

ザインにも覚えがある感覚だ。痛々しい気分になる。

同じだと思っていた子供と、自分が違うこと。帰る場所がないこと。誰にも想われないこと。

それはどれも、悲しい。

エルを気にするトイとザインに気が付いたのか、クウがエルを見て笑顔になる。

「えーっとね、エルっていうんだ。オレのパートナーでケツコンするん——あいたっ」

「パートナーじゃないし誤解を招くような発音で発言するな」

後頭部をはたかれたクウがぶすつとむくれる。

トイはじつとそれを見つめていた。

「……助かった」

途切れてしまったトイとの会話にクウが気付く前に、ザインはエルに声を掛ける。エルが藍色の視線を持ち上げて、煙草の煙を吐き出した。

「別に——これからだろう」

それは全てを含めた言葉で、心臓を不安で驚掴みする。

「子供達は、どうなるんだ」

不安に負けて、口が滑った。トイが俯くのが分かったが、一度出した言葉は口には戻らない。

「……被害者として、事情聴取だの一応の捜査が終わるまでは特務機関が預かる事になるのは確かだ」

「それ以降は」

「さあな。——これだけの事件だ。ニュースにもなるだろう。話題になれば引取先を名乗り出るヤツやら援助者も出てくると思うが」

それで子供が救われるかどうかまでは、分からない。それは当然の話だ。

ヴァンパイア特務機関の仕事は、メタムを捕まえる事だった。それ以上でも、それ以下でもない。けれど、縋らずにいられない。

「何とか——なんねえのか」

「何とかって何だ」

「だから」

そのままザインは言葉に詰まってしまった。割り込んではいけな
いと考えているのか、クウは黙ってエルとザインを交互に見ている。

トイはずっと、俯いたままだ。

ふうっと、エルが溜め息のような紫煙を夜空に浮かべた。

「言っただろう。自分を助けられるのは自分だけだ」

「で、でもお前なら」

「妬みや欲は生きる原動力になる、だが妬んでいるだけで何になる。生まれながらにして不平等なのは当たり前だろう。家紋が首にあれば、幸せだと思うのか」

真っ直ぐに問いかけられて、何も言えなくなった。

エルはただ、問いかける。

「家紋がないお前達は、不幸なのか。——それは、誰が決めた」

ザインが顔を上げる。エルは視線を反らさない。ゆっくりと、トイがその瞳を開いた。

（誰が、決めた？）

帰る家のないことに、酔っていた訳ではない。個人では太刀打ちできない、世の中の仕組みは存在する。

だがそれでも、生まれながらにして不幸だと、ずっと不幸なままなのだと、誰が決めてしまったのだろう。

「自分の居場所くらい、自分で作れ。それは誰でもやってる事だ」
風が隙間を吹き抜けた。何かを振り払うように、柔らかく頬を撫でていく。

瞳を閉じたエルは、黙って煙草を吹かしている。クウは何を思ったのか、夜空を見上げていた。

「——あの」

小さく声を上げたのは、ずっと黙ったままのトイだった。俯いたままの顔を上げ、噛み締めていた唇を解く。

「助けてくれて、有り難う御座いました」

そして、笑った。

それにザインは驚く。そして——気が抜けた。

「良かったな、トイ」

クウも破顔してもう一度繰り返す。二人で逃げ出した時と何ら変

わらない笑顔で、トイもそれに答えた。

「ああ。お前には吃驚させられたけどな。——でも、有り難うな、クウ。助けてくれて」

「何言っただよ、助けてくれたのトイじゃん」

クウの言葉にトイが目を瞬く。エルもザインも黙ってクウを見つめた。

笑顔のまま、クウは当然のように先を続ける。

「最初、自分が捕まってるのに、逃げろって言うてくれた。助けてくれて有り難うな、トイ」

その言葉に、トイがその大きな目をいっぱいに見開く。その驚きは、すぐにぐしゃぐしゃに歪んだ。

大粒の涙を浮かべて奥歯を噛み締める子供に、ザインは泣くなよと笑う。嗚咽を堪えるトイに驚いたクウが、身を乗り出した。

「ト、トイ。何で泣いてんだ？ オレ、なんかへんなこといった？」

「お前が泣かせてんだよ、クウ」

「ええ？ なんで？ ……泣くなよトイ、折角自由になったんじやんかあ……」

ザインの言葉に訳が分からなくなったらしいクウは情けない声を上げて、トイを見つめる。その瞳が困惑して揺れていたかと思うと、瞬く間に潤み出した。

その様子を見ていたエルが、呆れて声を投げる。

「おい、お前まで泣くなよ。泣く前に殺すぞ。町が壊れかねん」

「だ……だつてえ……っ」

「——っだ、ダイジョーブっ」

ごしごしと乱暴に目元を擦ったトイが、笑った。釣られて泣きかけていたクウもその笑顔に、潤んでいた瞳を瞬く。

「ほんとに、サンキュなクウ。——オレさ、これからどーなるか分かんないけど。お前みたいに誰かを助けられるようになって、幸せになるから」

その子供の決意は、ただザインの胸に響く。

「そしたらさ、今度は遊ぼうな。絶対だぜ」

「——うんっ！　なあエルいい！？　しごと、ちゃんとするから！」
「好きにしたらいいーだろ」

やったあと両手を上げて喜ぶクウの横で、エルが肩を竦めている。
一人立ち尽くしたザインは、じゃれ合う子供達をただ、見つめていた。

トイと遊ぶ約束をして、地下室の捜査に駆り出されたクウは船を漕ぎつつあった。今までは興奮して眠気がなかったのだろうが、もうすぐ空が白み始めるような時間だ。その様子を見ていたエルは、危なっかしい足つきに舌打ちする。

「おい」

「ん……だい、じょーぶ」

「いい。今日は切り上げる」

地下室への入り口まで案内したのだから、後は他の捜査員に任せて休んでもいい。くると方向転換したエルはクウの歩調に合わせていては夜が明けると、その小さな身体を抱き上げた。

抱き上げられたクウは、本格的に眠りに落ちかけていた。そういえば昨夜から行方不明だったのだ。ろくに食事も、睡眠もとっていなかったのだろう。

「……おい、クウ」

「——ん……？」

「六時間後には叩き起こすからな」

この捜査は一日や二日で終わらない。捜査官であり、被害者でもあるクウには働いてもらわねばならなかった。それはクウがヴァンパイア特務機関に所属する以上、子供だからと避けられない事だ。だがそもそもクウがヴァンパイア特務機関に所属した理由を考え

ると、エルに鬱陶しい罪悪感がこみ上げる。

助けてもらったから。

トーイにもそう言っていた。

「……お前は、バカだなほんと」

エルの首もとに額を預けて、クウは寝息を立て始めていた。その寝顔に瞳を細めて、エルは自分達の控え室として扱われる事になった東の客間の扉を開く。

シーツを剥ぎ取り、クウを横たえて毛布をかけてやった。その後はもう静かなもので、エルは窓辺に立って煙草を取り出す。

だが煙草の中身は空だった。小さく舌打ちして、その箱を握りつぶす。

窓越しに見上げた空には、大きな月がまだ見えた。

クウには、行き先がない。あの子供と同じように。けれどクウはそれを意に介さない。

まるで居場所がないことが当たり前のように、不幸なことだとすら感じていない。

「……まったく、変なヤツだな」

あの子供は幸福になってみせると笑った。

ではクウは。

そして、自分は。

もう忘れろと、前へ進めと、そう見守られているのを知っている。けれど忘れることも前へ進むことも、できない。そう思っていた。

だが夜は、望む望まざると関わりなく明けてしまうのだ。

そう、あの人も笑っていた。

——それを忘れたことも、なかった。

ZERO 9話

「この報告書は嫌がらせか？」

「とんでもない、あのアホの訓練の一環ですよ」

取り澄ましたエルの言い分に溜め息を吐いたゼスは、つまらなそうに漆黒のテーブルに頬杖を突いた。

「お前なークウに報告書の書き方くらい教えろよ、全部平仮名でたまにイラスト入りの説明って、これじゃあまるで小学生の夏休みの日記だろうが。つかお前が書けばいいだろ今までみたいに」

「いつまでも甘やかすのは良くないと思ひまして。ご不満ならゼス先輩がご指導なさったら如何ですか」

「うつわすっげー開き直り。……分かったいーぜ、クウ呼んでこい。オレが報告書作り直す」

案外あっさりと引いたゼスに驚いたのはエルの方だった。勤めて無表情を装う後輩が素直に意外だという顔をした事に、ゼスにはやりと意地の悪い笑みを浮かべる。

「子育ては大変だろー？ 少しくらいなら手伝ってやるよ」

「——失礼します」

「またまたあ照れなくてもいいんだぜえ。ま、これで一件落着だな。——被害者の子供達も全員引取先が決まったそうだ」

これには素直に驚いた。今度は普通に笑ったゼスが、感想を付け加える。

「ま、世の中まだ捨てたモンじゃないって話だよ」

部長室を出て廊下を曲がると、SSランクがその本部を構える階としてはあまり考えられない笑い声が飛んでいた。任務を終えて帰ってきたらしい先輩方とクウの姿に、エルは顔を顰める。

「おーエル、呼び出しお疲れ。随分足止めくらってたんだな」

「逮捕者が多かったので、現場で指示しなきゃならない事が多かったものですから」

「そっかークウも頑張ったな。そうそう、クウから聞いたぜー」

思った通りの展開にエルは嫌そうな顔をするが、赤褐色の髪を持つ脳天気な先輩は全く頓着しない。たかいたかいをして遊んでやっていたクウを床に下ろし、心の底から嬉しそうな笑顔を向ける。

「クウ、引き取ったんだってな。良かったなあクウ。パートナーまでもう少しだな！」

「……それとこれとは別問題です、レオ先輩」

「殆ど一緒だろう、往生際が悪いぞエルフアーロ」

レオの横に立っている素っ気ない声の持ち主は、レオのパートナーだ。

「まあお前も父親になると決めたからには精進しろ。鍛錬を怠るな、そもそも貴様は普段からやる気が足らん！」

「仕事はやってます。それに父親になった覚えはありません、単なる後見人です」

「どう違うんだ。一緒だろうが」

レオも大雑把だが、この先輩はその上をいく。むしろ律儀なのが、考え方が大胆で割り切りが良かった。反論するだけムダだと悟ったエルは溜め息を返すだけに止める。

「まーまーロウ、帰って早々説教はやめとけって」

間に入ったレオには悪いが、エルは何も答えずにそっぽを向いた。その態度は何だとロウが顔を顰めても、知らんぷりを貫く。それをレオが更に宥めていた。

十三歳でSSランクに所属し、パートナー不在とはいえ単独で好成績を上げ続けるエルの行いに口を出せるのは、部長であるゼスとそのパートナーであるビナ、そしてこの二人だ。名実ともに個人でもペアとしてもヴァンパイア特務機関のトップに位置づけられているこの二人に逆らおうものなら、他の連中から何を言われるかも分

かったものではない。だから、逆らわない。だが、できるだけ相手にもしない。

その子供じみた反発心こそがこの二人にそれなりの気を許している証だと自覚はしているが、認める気はなかった。

「なーレオ、後でさたたかおうよ」

「ん？ 何だ何かあったのか？」

「さっきゆったじゃん、レオより強いって言ったヤツ！ 一発殴ったら飛んでった。レオはもっとえーもん。オレ、こないだ負けたし！」

苦笑したレオがわしゃわしゃとクウの頭を乱暴に撫でる。そしてクウと同じ目線の高さにながみ込み、クウが首から吊り下げている携帯電話を見た。

「じゃあ後でケータイ鳴らしてやつから待ってる。これ、エルに買ってもらったのか。首から下げるヤツ」

「うん！ なくすなって」

「そっか良かったなあ」

レオはゼスのように含み笑いをするだとか、そういった仕草はない。だが何故かからかわれた気分になって、エルは憮然とする。

「それにしても銀のロザリオをよりにもよって携帯のストラップにしてしまうのはどうなんだ。いいのか。玩具みたいに扱っては他に示しがないんじゃないのか？」

「いいだろクウ、固い事言わなくても。なくさねー方が大事だって。クウは武器持っていないからな、ベルトに引っかけただけってのは落としやすいし」

レオの説明に納得したクウはそれもそうだなと大仰に頷いた。そして立ち上がり、背伸びをする。

「じゃーオレ達も報告行か、クウ」

「そうだな。クウにエル、仲良くやれよ」

ゼスが居ればお前達が言うなというツツコミが入る所だが、生憎それを口にする気はエルにはなかった。考えも及ばないクウはエル

の服の裾を掴んで手を振ろうとしている。

その姿に、エルは先程ゼスに言われた事を思い出した。

「おいクウ、お前も行け。ゼス先輩が呼んでる」

「え？ うん分かった。レオ、ロウ、オレも行く！」

素直に頷いたクウは、エルの服の裾を離す。顔を顰めたロウがクウの頭を軽くはたいた。

「ロウ先輩だと言っているだろう、クウ。教育がなつとらんどエル
！！」

「何でオレが怒られなきゃなんないんですか、言いがかりです」

「無責任だぞ貴様、それでもクウのパートナーか！」

「だからパートナーじゃないですって！」

「あーもーいーから行くぞロウ！ エル、またな」

収集がつかないと判断したレオがロウを引きずり、クウの手を引いて歩き出す。レオに何ごとかロウがまたくつてかかっていたようだが、もうエルの与り知らぬ所だ。

一人きりになり、何気なく腕時計を見れば、昼時だった。空腹とは言い難かったが、いつ何時事件が飛び込んでくるか分からない。今の内に食事をとっておいた方が良さそうだった。

食堂でも良かったが、一人きりは久し振りなので外出したい気分になった。そのままエレベーターを使い、一階のフロアを通ったエルは、外へ出る自動ドアの向こうからやってくる人物に目を瞬く。

「お、ドーモエル先輩」

ザインだった。相変わらず人を小馬鹿にしたような笑みを浮かべ、ザインはエルに一礼する。

「……お前、何でここに」

あのメタム領主の一件での事情聴取は二ヶ月以上前に終わっている。逮捕者は百名以上に昇り、あの町自体が子供を売り買いする町として機能していた事が判明した。早い話、町ぐるみの犯罪だったのだ。

メタム事件と呼ばれている今回の騒動は、吸血鬼の血を引く子供

のあり方について世論を巻き起こし、議論を呼んでいる。芋蔓式に児童施設や孤児院に厳しいチェックが入るようになり、その後摘発された人間が後を絶たない状態だ。

そんな中、このザインという男はトリーの証言と、メタムに協力しながらも一部の子供達を助けていたという事実、メタム逮捕に協力したというクウとエルの証言、また事件解明に積極的に協力したという功績から逮捕を免れていた。その後は姿を消したとしかエルは聞いていない。

「何だ。今度は何をやった」

「人聞き悪いなあ。さつきエル先輩つつたじゃないですか」

「……何だと？」

その意味する所に顔を顰めたエルに、にやりと笑ったザインはわざとらしく敬礼する。

「先日、ヴァンパイア特務機関Bランク所属になりました、ザイン捜査官です。つつつてもまだ修習生だから正式な配属は半年先だ」

呆れたエルの顔に、ザインは怖じけずに笑ってみせる。

ヴァンパイア特務機関捜査官選抜試験は確か丁度一ヶ月前だった筈だ。姿を消したと思っていたら、選抜試験を受けていたらしい。選抜試験は一年に一度だから、その年を逃せば受験は来年になる。しかしろくな受験勉強期間もなかっただろうに、Bランクとはいえよく受かったものだ。

「……お前も筆記試験は0点だが実技試験で通ったクチか」

「いやー一応二十点くらいはあるとは思っぜ。ま、殆ど実技の方で受かったつてのは認めるけど。筆記もありやAランクくらいいったかなーとは思っただが今から出世するさ。実技の点数だけでBランク所属したつてんで結構有望株なんだぜーオレ」

「バカか」

冷たく一刀両断したエルに、ザインはむっとする。

「何だよ相変わらずスカしたヤツだなあ。SSランクか何だかしらねーけど、すぐに」

「お前じゃせいぜいＳランクが関の山だ、諦める。——ついでに筆記試験０点だが実技試験だけでＳＳランクに所属した大バカが居るって事を教えておいてやる」

「げ、誰だよそいつ。——……まさか」

答えずに、エルはただ笑った。それだけで察したのかザインは両腕を組んで溜め息を吐く。

「マジかよー……そりゃつえーと思ってたけどさ」

「ヴァンパイア特務機関の選抜試験は点数に上限がないからな。そういうこともある。筆記試験０点で合格するのは流石に初めてだったらしいが」

「やっぱバケモンだなあのガキ」

「——ついでに教えておいてやろう。ヴァンパイア特務機関ではランク制は絶対だ。オレを先輩と呼べるようになるのは、ＳＳランクに所属してからだぞ。呼びかける時はインテグラ捜査官、敬語を使うのが基本だ。分かったか」

「げ」

嫌そうな顔をされてもそれがここの決まりだ。それは分かっているのか、渋々ザインが頷く。

「わかりましたあインテグラ捜査官。これからご指導ヨロシクお願いしまーっす」

「……例の子供達は引取先が全員決まったそうだ」

「ああ」

「何だ知っていたのか」

エルにしては珍しく親切心を働かせてやったのだが、ザインはもう知っていたらしい。エルを見てザインはあっけらかんと笑う。

「だって全員引き取ったのオレだしな」

「——は？」

「あ、何十人かはちゃんと余所に引き取られていったんだけどな。残りは面倒だから、オレが引き取った。お前等のおかげで町全部が売りに出される事になって安く買えたんで、町はずれの屋敷買い取

ってそこで暮らしてんだ。トイがなかなかしつかりしてるからそ
うちに任せてオレは出稼ぎって訳」

絶句したままのエルに、淡々とザインが先を続ける。

「なんつーかな。罪滅ぼしって訳じゃねーけど。お前が言う通り、
オレはもう子供で誰かに助けてくれてトシじゃねえよ。でも子供
達食わせてくには金がある。大枚はたいて大決断したはいーけどど
ーしたもんだかと思つたら、ゼスとかいうオレを事情聴取した捜査
官がヴァンパイア特務機関はどうだって、受験申込期間すぎてるっ
てのに推薦書つけて無理矢理押し込んでくれてな」

その名前にエルは眉根を寄せた。あの部長は、飄々として巫山戯
ている癖に抜け目がない。

「聞いてみたら年齢も身分も何もいらないうて言うし、給料も良い
しな。子供達もそこその年齢のヤツは働いてくれてるし、子供達
の世話とかはトイに任せても大丈夫そうだったし、オレがこーし
て出稼ぎしてりやこれから先も何とかなるだろと思つて」

笑うザインに、初めて会った時のような翳りはもうなかった。
成る程、確かに世の中捨てたものではないらしい。

「——援助や募金が欲しいならそういうのが得意なご家庭の先輩を
紹介してやる。いつでも言え」

「え、そんなの居るのかよ。……ああまあ、吸血鬼もイメージアッ
プは大事だからな」

「あそこの家に限っては本当に正義感と善意だと思うがな。家をあ
げてのバックアップでなく募金という形ならいくらでもいる」

「ふーん……ちなみに援助してくれそうなご家庭の先輩って誰だよ」
「レオ先輩」

その名前に聞き覚えがあるのか、ザインは硬直した。目元を緩め
たエルは、余計な一言を付け加えてやる。

「ちなみにレオ先輩は、お前がクウに向かって言った事、知ってる
ぞ」

「げ」

「自業自得だ。ま、精々顔を合わせずに済むよう祈っとけ」
言い捨てて自動ドアをくぐり抜けると、快晴の空が見えた。
そして何故か、ふと思い出した。ヴァンパイア特務機関連捜査官選
抜試験。今年はどういうべきか、今年もというべきか、SSランク所
属者は出なかった。

ということは、クウに後輩はできなかったという事になる。
(ああそうか、丁度去年の今頃か)

——ヴァンパイアとくむきかん、ダブルエスランクしよぞくにな
りましたゼクウです。

エルのパートナーになりきたんだ、オレ！

恐ろしい誤算は多々あったが、こんな快晴の空で思い悩むのもバ
カらしい。それにどうせ頭痛の種は後から追いかけてくる。

それまではこの晴れ晴れしい気分を満喫しようと、エルは階段を
一段ずつ降りる。

ベルトに付けたロザリオが日の光に揺れて、銀色に煌めいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5446j/>

Blueblood

2010年10月8日11時53分発行